

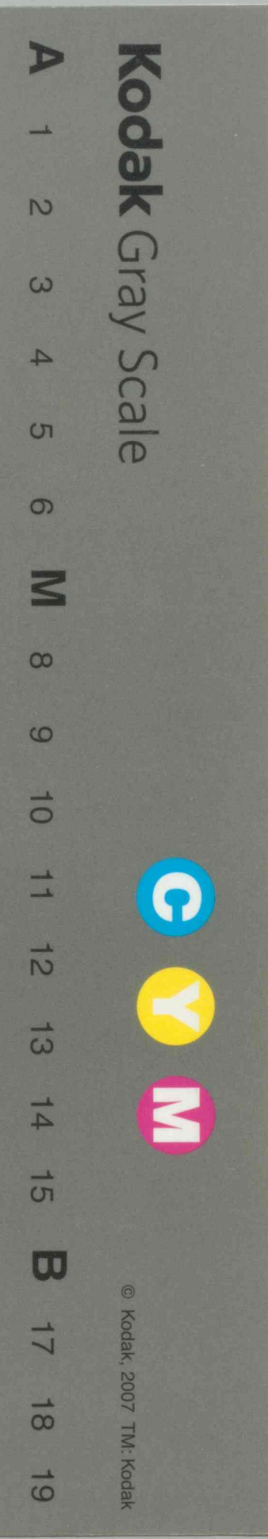
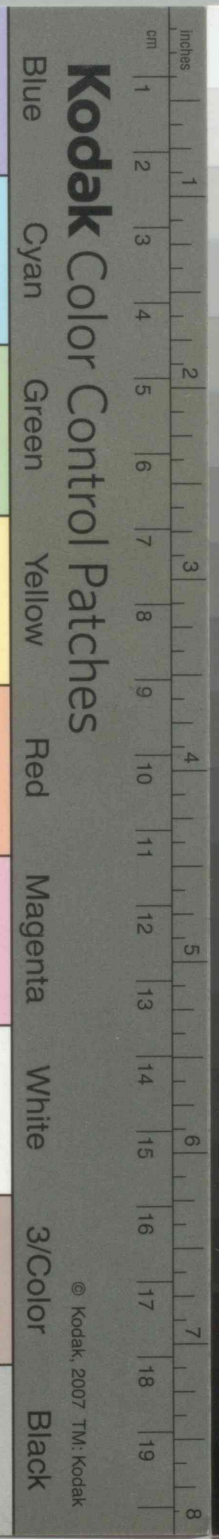
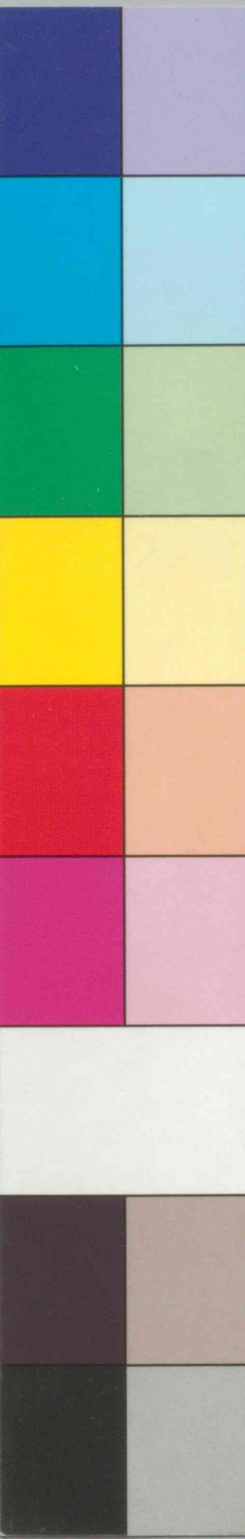
12
二葉 小国 627

教育部
教育実践研究所編
資料室

国語の本



教
34
013



60141
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49930



中央図書館

贈

寄

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449930

文昭和二十五年
 部省
 検
 定月
 濟日
 小学校国語科用

国語の本 十一

第六学年 上

広島大学図書
 0130449930




広島大学
 教育学部図書

広島大学図書
 0130449930





もくろく

一 花のように

- (一) 花……………4
- (二) 運動場……………6
- (三) ここに手がある……………8

二 新聞の話

- (一) 輪転機のうなり……………10
- (二) 新聞の歴史……………21

三 愛の力

- (一) やまどりのおかあさん……………30
- (二) めぐりあい……………35

四 工夫と発明

- (一) 電燈の消えた時……………52
- (二) ものいうおもちゃ……………61

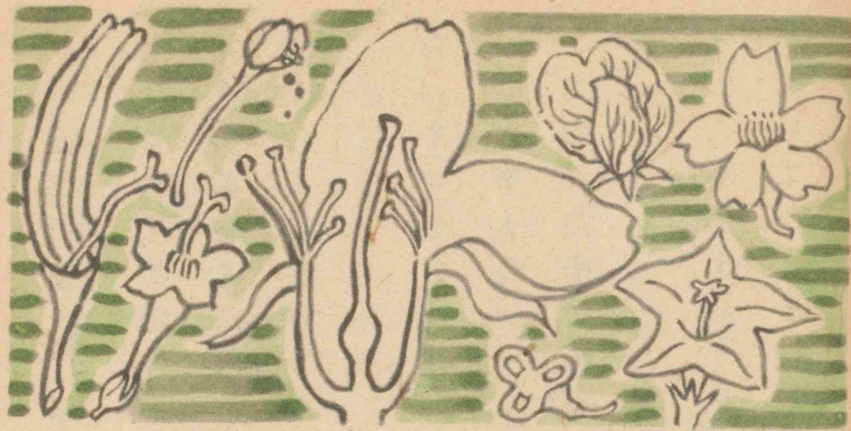
五 世界の旅

- (一) アメリカの町々……………72
- (二) イギリスの工学……………76
- (三) フランスの美術……………81
- (四) スイスの風景……………86
- (五) イタリアの古都……………90
- (六) インドの子供……………94

六 新しい足あと

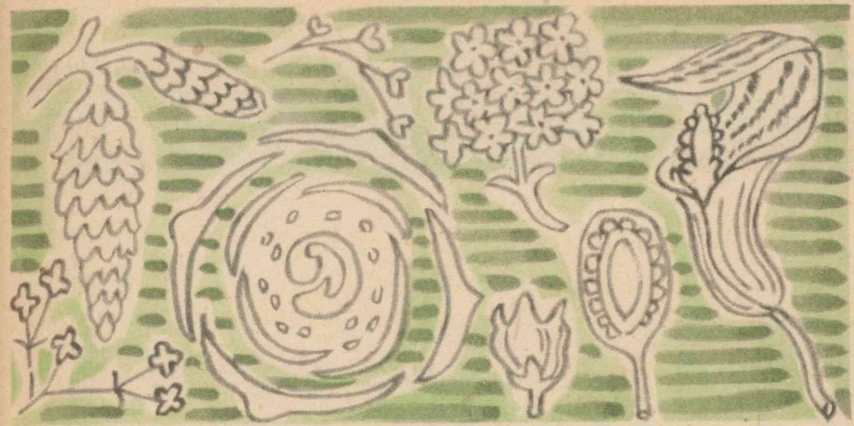
- (一) 原始林の明屋……………97
 - (二) 南極のスコット……………117
- 学習の手引……………145
 - 新しく出たおもなことば……………153
 - 新しく出た漢字……………159





この花のけだかさを、
 生まれたままの美しさを、
 いつまでも心の中にもって、
 花のように私たちは生きよう。

ゆめのようにけむっている。
 ああ、なんという美しさ、
 なんとという平和の世界、
 大自然がつくりだした、
 こんな小さいものの中にも、
 満ち満ちている清らかさ。



一花のように

(一) 花

いちりんの花をとって、
 その中をごらんなさい。
 じつと、よく見てごらんなさい。

花の中に町がある。
 金色にかがやく宮でんがある。
 人がいく道がある。牧場がある。
 みんないいにおいの中で、

(二) 運動場

さくらの下では六年生のキャッチボールの音も正確で、そこはなにかゆうゆうとしている。

白いネットをはさんだ五六年女生のバレーボール。

さしのべた手が光のようになびく。

まつの木のまわりを、りすのようにまわる二年生のおにごっこ。



ぶらんことすべり台の一年生には、当番の六年生がつきそっている。

三年生、四年生は得意のなわとび。

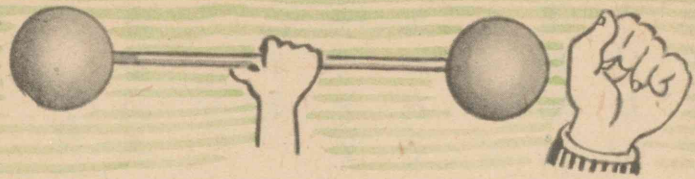
一つとんで二つとんで、

三つめでぬけ出す。

運動場はわきかえっている。

さけびがさけびをよび、動きが動きを追い、春の光の中に大きな喜びのさけび声がひろがる。





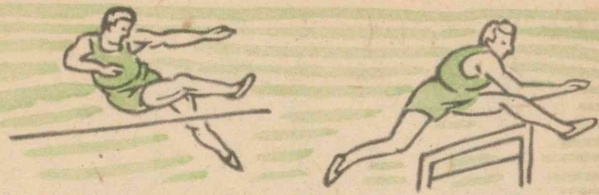
(三) ここに手がある。

ここに手がある。

この手は石を運ぶこともできれば、
ペンを持つて本を書くこともできる。
山をほりくずすこともできる。

ここに足がある。

この足は走ることもできればとぶこともできる。
どんな山だろうと坂だろうと、
また世界のはてだろうと歩いてゆける。
この手と足、



この手と足さえあればなんでもできる。
木のぼりはもちろん、ぼう高とびだって、
泳ぐことだってなんでもない。

ここに手と足がある。

この手と足をきたえよう。
もっともっとむずかしいことだってできるように、
どんな苦しいことにもたえられるように。



二 新聞の話

(一) 輪転機のうなり

一 新聞社のはと

きょうは新聞社の見学です。私たちは電車をおりて、新聞社の前に集まりました。中にはいると、そこには、たくさんのおつかえがならんでいて、みんなそがしそりに事務をとっていました。受付には黒山のように人が集まっています、「何々さんをよんでください」という声がとてもにぎやかです。しばらく待っていると、先生が案内係の人といっしょに私たちの所へいらっしゃいました。はじめエレベーターで七階にあがり、そこから屋



上に出ました。屋上はとても広くて、ひと目で町をながめることができます。

屋上のすみに、はと小屋がありました。赤い目をしたかわいいはとが、めずらしそりに私たちを見ていました。はと係のおじさんが次ぎのようなお話をしてくださいました。

「今、はとは二百ぱほどいますが、そのうちの半分ぐらいが伝書ばととして使われています。飛ばす時は、うすい紙に記事を書いて足につけ、写真はアルミ管に入れてせおわせます。」

こういって、おじさんは実際にやって見せてくれました。写真通信管をせおつたはとは、とても勇ましく見えました。

「はどの運べる重さは六グラムか七グラムぐらいです。飛ぶ速さは一分間に平均して約一キロメートルで、今までの最高記録は、千キロを十三時間で飛んだことです。」

おじさんは、はどがかわいくてたまらないというようすで、小屋の中を見つめました。

2 世論調査

今度は、エレベーターで三階におりました。世論調査の室です。十人あまりのおじさんたちが、上着をぬいで計算したり書きものをしていたりしました。係の人の話によると、ここは、

国民がどういふ考えかたをしているかを調査するのだそうです。たくさんの方の投書を、みんなて手分けして読み、その中からよいものを選んで、新聞にのせるのだそうです。また、このまえの衆議院議員選挙の時に調べた、「あなたはどのとうを支持しますか」といふ記録も見せてくださいました。この統計をする時は、三日も四日もてつ夜をしたそうです。選挙の結果は、統計とほとんど同じだったそうです。私たちは、この話を聞いて、新聞に出ている一つの統計でも、これをまとめるにはずいぶん苦勞するものだと感じました。何十万という大きな数になるので、計算器や計算じゃくを使うのだそうです。計算器はタイプライターの機械のようなもので、計算する数字をおもてに出し、ガチャガチャとハンドルをまわすと、答が出るしくみに

なっています。私たちは、その使いかたを教えていただきました。

3 編集局

いよいよ編集局です。広い大きなへやには、方形の大きなつくえがならんでいて、その上には、社会、運動などと書いた木の三角とうが立っていました。全部で十三部もあるのだそうです。各部には、それぞれ何十人もの記者さんがいて、役所に行ったり、事件のあった所に出かけて行ったりして、記事を送ってくるのだそうです。ざら紙のげんこう用紙に書いて



あるニュースも見ました。記事は全部整理部へまわされ、ここで見出しをつけたら、誤字をなおしたりして検査し、それから電気ベルトで印刷工場に送られます。私たちが行った時は、ベルトがにぶい音を立てて回転しながら、げんこうを次ぎの工場へ送っていました。案内の人は、「整理部は、おうぎのかなめのような所です」と、教えてくれました。



編集局の列の方には、電話の受話機がずらりとならんでいます。全国からくるニュースを、これで聞きとるのだそうです。電話のほかに、テレタイプという機械があり、モールス記号の

ト・ツト・ト・ツトといふ音といっしよに、細長い紙にかたかなの記事が現われてきます。そのそばでは、かんそう機で写真をかわかしていました。届けられた写真が、約十分ぐらいて現像されると聞いて、その仕事の早いのにびっくりしました。

電送写真室も見学しました。機械に写真を取りつけて、実際に動かしながら説明してくださいました。たて二十四センチ、よこ二十八センチの写真は、約七分で送ることができるそうです。電送写真は、よく見ると、はりてついたような点でできていました。これは、写真の白い所と黒い所を、強弱の電流にかえて、送り、受電そう置の方では、その電流を強弱の光にかえて、小さなあなから、印画紙に感光させるためだそうです。

4 印刷局

編集局を出て、今度は印刷工場へ行きました。そこは、たいへんないそがしさて、みんな油だらけになって働いていました。電気へルトで編集局から送られてきたげんこうが、活字を拾う

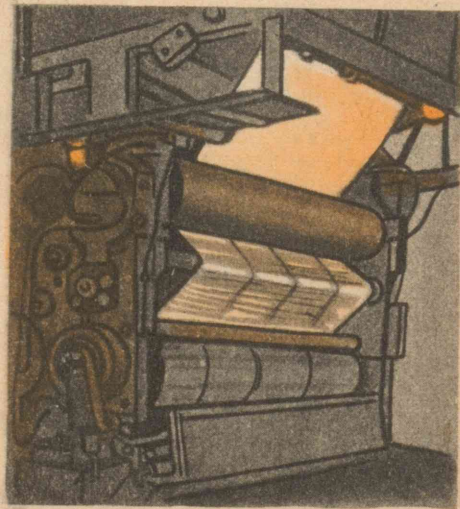
人の手にわたると、その人たちは、大きな見出しの活字と、ふつうの活字とを、じょうずに拾います。それから、活字を糸でくくりつけます。それを小組というのだそうです。小組のまま小さな紙に印刷したのがゲラ刷で、ゲラ刷は次ぎの校えつ部へ送られ、校えつ



がすむと、大組の方にまわされるのだそうです。大組の人は、集まってくる小組を、はこのようなものにきっちりとつめて新聞の型をつくり、次ぎの紙型をこしらえる人にわたします。紙型にする厚い紙を大組の上のせて、圧さく機の中に、百五十度の温度で三分半ほど入れると、紙型ができるそうです。紙型は、活字に厚紙のあとがくいこんでいて、厚い新聞紙のようなものでした。その紙型に、なまりを流してえん板をつくり、水でぬらしながらまるく曲げ、それを輪転機にかけるのだそうです。新聞に使った活字は、一日使っただけで全部とがしてしまひ、また新しい活字につくりなおすとのことでした。活字をつくる所では、たくさん機械が動いていて、活字が次々に出ていきました。ケースにはいった活字は、あすの新聞に使われるのだそうです。

5 輪転機のうなり

私たちが行った時は、まだえん板をとりつけているところで、輪転機は動いていませんでした。えん板は、竹のつつをたてにわたったような形で、これを輪転機にはめこみます。しば



らくすると、ベルがなりました。すると、O・Kの信号が出ました。機械は、待っていましたといわんばかりに、もうれつな音をたてて、いっせいに動き出しました。たいへんな勢いなので、すぐわきの人に話すのにも、耳のそばに口をよせて、大声

で言わなければなりません。

印刷する紙は、新聞紙二ページ判を、横に四まいならべた大きさのもので、それがまいてありました。しんぼうが一回転すると、一どに八まいも印刷できますが、印刷された新聞は機械の力で一まい一まいにたち切られ、ふたつ折りにされて、電気ベルトで、次々と発送部に送られています。

6 発送部



発送部へまわされた新聞は、係の人がす早く大きな紙に包んで荷づくりし、はばの広い電気ベルトで次ぎから次ぎへと送っていました。待っている貨物自動車

は、それを積みこんで各駅に輸送するのだそうです。毎日、配達される新聞は、こんなたくさんの人手や機械の力をかりて発行されるのです。私たちは、ほんとうにおどろきました。それと同時に、私たちは、新聞社の方々に感謝する気持ちで一ぱいになりました。

(二) 新聞の歴史

ひととおり見学が終わったので、ひかえ室で休んでいると、木村君が、

「むかしは、どんな新聞があったのですか。」

と、先生にたずねました。先生はにこにこしながら、「それは、よい問題を提供してくれました。新聞社の方もおい

そがしいでしようが、ちようどよい機会ですから、新聞の歴史についてお話していただくようお願いしてみましよう。とおっしゃいました。間もなく、先生といっしょに、まえとちがつた方がひかえ室にはいつていらっしやいました。この新聞社で編集の仕事をしている大木さんという方だそうです。私たちは、この方から新聞の歴史についてお話を聞くことになりました。

「みなさん、きようはよくおいでくださいました。それでは、これから新聞の歴史について少しお話いたしました。みなさんは新聞がどんなふうに発生したかご存じですか。まず、大むかしの人々の生活を想像してみましよう。未開時代の人々が、あちらの山、こちらの野に集団生活をしているとましよう。

いわば部落生活ですね。そうした場合、部落民どうしてはおたがいに助け合っている、他の部落の人たちとは、しじゆう争いながら生活していたにちがいありません。そんな時には、どなりの部落にどんなことが起っているか、敵がどんな武器を持っているかということが知りたくなります。それが興味のある話であるか否かにかかわらず、自分たちの生存のために大切なことだからです。したがって、どなりの部落のことについて何か新しいことを知れば、もうだまっではいられません。だれかれなしに、ふれまわるにちがいありません。何か新しいことを知りたい、知ったことは人に話したい、こういう性質はだれでも持っています。これは人間の本能だからです。

別にむかしのことでなくても、みなさんが何か耳よりなこと

を聞くと、もうだまっていられないことは、だれでも経験することです。つまり、新聞の発生は、こうした人間の本能にもとづくものなのです。ですから、人間が文字という便利なものを考え出した時、すでに新聞は発生したのだと考えてもよいわけです。

さて、新聞の発生は人間の本能によるのだということを申しましたが、それでは、次ぎに、現代のような新聞はいつごろからできたのでしょうか。それは、十五世紀の中ごろのことです。ドイツのグーテンベルグという人が印刷機を発明しました。これが新聞発行の原動力となったことはいうまでもありません。十六世紀の中ごろには、イギリス、フランス、イタリア、ドイツなどで新しい印刷機を使って、盛んに新聞が発行されるようになり

なりました。最初は週刊の形で、大体発行都市を中心に、政治上の動きなどをありのままに書きつらねました。新聞に対する人々の関心が高まり、言論機関として勢力を得るようになるにすぎない、その形式や記事にも改良が加えられました。こうして、十九世紀ごろには、政府に対する民間の機関としてどんどん発展し組織化されて、現代ではすばらしい発達をとげています。

ところで、これは外国の新聞の発達史であります。日本の新聞はいつごろから発行されるようになったのでしょうか。日本の新聞のおこりは、千八百六十二年（文久二年）に出た官板タバタ新聞だといわれています。しかし、前にもお話したように、多くの人間が集まって社会生活をしており、交通関係のあると

ころには、必ずニュースがあるものですから、現代のように整った形ではないにしろ、なんらかの形で早くから出ていたものと思われれます。

めずらしいのは、徳川時代に出た読売かわら版という新聞です。これは、天災、火災など時事的な事件を、絵入りでそまつな木版の一まい刷りにし、大道で読売りしたものです。現在残っているもので一ばん古いものには、元和八年五月の大きか夏のじんの合戦をえがいた「大きかあべ野合戦」というのがあります。



さて文久年間には、アメリカ、オランダ、中国などの新聞を

輸入し、それを日本向に訳して印刷発行した海外通信というのがありました。たとえば、バタビヤ新聞、海外新聞、海外新聞別集、あるいは、中外新報、六合そう談、ホンコン新聞などのようにたくさん種類がありました。これを総称して文久新聞ともいっているのですが、明治の前に、もうこのような新聞がさかんに発行されていたのです。

しかし、これもやがて発行中止になり、こんどは洋書調所の洋学者が、会訳社というものをつくり、そのころ横浜で発行していた英字新聞を訳して、日本新聞、日本貿易新聞、日本交易新聞などといって希望者に配布していたことが記録に残っています。その後も、各種の新聞が出ていましたが、やがて明治三年十二月に、「横浜毎日新聞」という日本ではじめての日刊新聞

が発行されました。日本の新聞のはじまりは、どちらかとい
と、外国新聞のえいきょうが強いです。これは海外事情を
早く知りたいという、当時の社会の要求によったものといえま
しょう。

明治十四年ごろ、国会の開設をめぐって政治運動がさかんに
なつて、新聞も政治上の議論を主とするようになり、いわゆる
政どうの機関紙時代があらわれました。こうした傾向も、明治
二十二年の憲法発布と共におとろえはじめ、評論新聞、ご楽新
聞から、だんだん報道中心の新聞として著しく発達するようにな
りました。ことに国運が開け、ひろく世界各国と交しよを
持つようになり、需要も多くなるにつれ、新聞の種類はもちろ
ん記事の内容もしだいに変化してきました。発行の中心はなん

といつても東京と大さかて、発行される全国紙は、何百万とい
う数にのぼりました。また、地方紙にも有力なものがたくさん
あらわれ、それぞれ特色のある記事をのせるようになりました。
現在では新憲法の示すところによつて言論の自由が保しよさ
れ、真実なニュースが正確びん速に報道されています。空气中
に酸素が無くてはならないように、今では、社会に新聞は欠く
ことのできないものとなりました。どうか、みなさんも、新聞
の正しい意義を理解して、新しい文化國家を建設するために協
力していただきたいと思ひます。

大木さんの熱心なお話は終わりました。私たちは、思わずはく
手をしました。大木さんにあつくお礼を述べ、新聞社を辞して
帰りました。

三 愛の方

(一) やまどりのおかあさん

私が歩いているのは、海抜つ八百メートルほどの高原だった。そんな高さの所では、六月の末といっても、風はまだ冷たかったが、見るかぎり目のさめるようなわか葉で、道ばたには、トウギボウシという名の、うすむらさきの花がならんでさいていた。まるで花のろうかを歩いているようだった。私はリュックサックのほかに、テントもかついでいたので、せなかが重かったけれど、気も軽々と、その花の道を歩いた。

道はやがて林の中へとはいって行った。道ばたに幹の太いも

みの木やせいの高いすぎの木がしげっていて、その下は深い日かげをつくっていた。そのかげの中へ、日の光がこぼれているので、風がふいて木の葉が動いたたびに、光がちらちらとひらめくのが、まるでげん燈のようだった。そんなげん燈のような光の中で、何かがちよつと動いたようだったが、私は、日の光が動いたのだと思って、通り過ぎた。しかし、一キロも歩いてから、「さっきのは、どうも日の光ではなさそうだ。何か鳥だったかもしれない」という考えが、だんだん強くなった。ともかくもどつてみようと、私は思った。そうして、もとの所へひき返した。

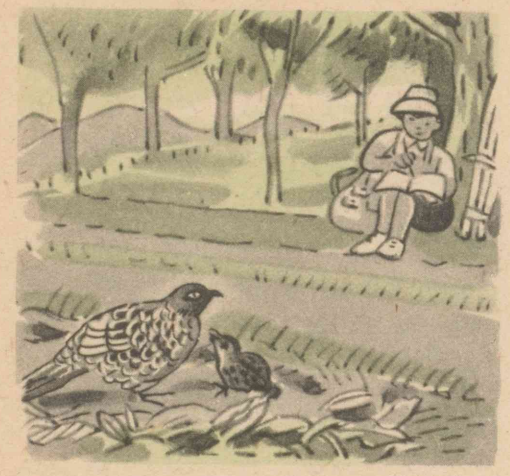
はたして、それは鳥のすだった。やまどりが、地べたにこしらえたすの中で、かわいいひなをだいてあたためていたのだっ

た。

やまどりのすは、地べたを少しくぼめて、その上に、落葉や
かれ草をくわえてきてしきつめただけのものだ。が、そこでひ
なたちをだいてあたためている親鳥のはねの色が、茶色のふち
なので、あたりの物とまぎれてしまう。めすの方は、おすのよ
うな長いおをもっていないので、なおわかりにくい。ちょうど
かれ草の中へ、フランスパンをころがしたようなものなのだ。

おまけに、やまどりは人がそばを通っても、ほかの小鳥たち
のように、あわててすから飛び立つようなことはしない。ただ
じっとしているだけだから、人は気がつかずに、そばを通り過
ぎてしまう。たぶん、こうしてじっと動かずにいると気づかれ
ずにすむので、ひなのためにかえって安全だということをよく
知っていて、そうしているのだらう。

それでもこのやまどりは、私がそこを通った時に、おどろい
てちよつと首を曲げて、私の方を見たものらしい。その首の動
きが私の目にとまったわけであった。一キロも歩いてから私が



気がついたことは、やっぱりそのとお
りだったのだ。

私はやまどりのすぐそばにしゃがみ
こんだ。手をのばせば届きそうな所で
写生を始めた。やまどりは、こわこわ
私をじっと見ていたが、目には落ちつ
かない不安の色があった。つばさの先
がかすかにぶるぶるふるえているのは、

もしも私が手をのばしたりしたら、飛び立とうという用意らしい。それでもやまどりは、ひなが大切だから、いよいよ最後のき険が身におよぶまでは、飛び立たずにじっと私のようすを見ているのだ。自分はどうなっても、ひなをかばおうとするこのやまどりのおかあさんの真けんさは、私の心を打った。

私は、木こりが、山の木を切っているうちに、こういうやまどりのすを見つけては、自分の着ているはんてんで親鳥をかぶせてつかまえてしまうことを思い出した。なるほど、このやまどりのようすでは、はんてんをかぶせてつかまえることもできるだらうと思った。

が、私は木こりの早わざなどよりも、こんなき険に臨んでもなおひなを守ろうとする親鳥の愛情の方に、どれだけ感心する

かshれない。だから私は、写生を半分でやめてしまった。いつまでも、このおかあさんのやまどりを心配させているのがかわいそうだったからだ。そうして私は、急いでそこを立ち去った。

(二) めぐりあい

フランスの、あるいなかの小さい村に、車だいくの夫婦が住んでいました。

ふたりとも氣だてのいい人で、その上、非常な働きものでしたから、わずかながらたくわえもできて、気楽にくらしておりました。

ただふたりには子どもが無いので、それがなげきの種でありましたが、そのうちに、その子どももやっどさずかるようにな

りました。男の子でしたのでジャンという名をつけました。長い間ほしくてたまらなかった子どもが生まれたのですから、ふたりはとてもジャンをかわいがって、ちよつとのまもジャンの顔を見ないではいられませんでした。

ジャンが五つになったとき、サーカスの一ざが流れてきて、村役場の前の広場に小屋をかけました。ジャンはそれを見るとこっそりと家をぬけだして、小屋のなかへ遊びにいきました。ジャンのすがたが見えないのにびっくりした父親は、ながい間あちらこちらをさがしまわりましたが、やっとジャンが、いろいろの芸をしこまれたためやぎや、軽わざをする犬にとりかこまれて、年よりの道化師のひざの上になだかれて、高い声をあげてわらっているのを見つけました。

その日はすぐにジャンを連れて帰りましたが、それから三日ばかりたって夕飯の時間に、食たくにつこうとした車だいくの夫婦は、いつのまにかジャンが家にいないことに気がつきました。

庭の中をさがしたけれど見つかりません。父親は道ばたに立って、声をかぎりに、「ジャン」とよびました。あたりはいつのまにか夜になっていました。野末には夕やみが立ちこめて、森も山もその暗いおそろしいやみの中にぐんぐん引きこまれていくように見えました。家のすぐそばにある三本の大きなもみの木はないているように思われました。いくどよんでも、どんな声も答えてはくれません、なにかしらけだものうめき声に似たものが、かすかに聞こえるばかりです。父親は長い間、じつと

耳をすましました。あるときは右の方に、あるときは左の方に、絶えずなにかが聞こえるように思われるのです。半分気持ちがいのようになった父親は、「ジャン。ジャン。」とよび続けながら夜の明けるまでかけまわりました。母親はかど口の石の上ですわったまま朝がくるまで、すすりないていました。ジャンのすがたは二度とは見つかりませんでした。

車だいくの夫婦はどんなにしてもあきらめることができず、悲しさのあまり、にわかにな年がよってきました。とうとうふたりは長い間住みなれた家を売りはらって、自分たちの手でジャンをさがしだすために旅に出ました。

ふたりは、山のおもとのひつじかいや通りがかりの旅あきんどや、また村へはいればひやくしように、町へいけば役所にい

って、いろいろとたずねました。しかしジャンが見えなくなつたのはずいぶん前のことだから、だれひとりとして知っているものはありませんでした。当人のジャンでさえ今では自分の名も、生まれた村の名も覚えていないにちがありません。もう何ひとつ希望はありませんでした。ふたりはなみだを流しておりました。

そのうちにわずかなたくわえもなくなつてしまいました。そこでふたりは旅の道すがら、ひやくしよの仕事を手伝つてお金をもらったり、宿屋を見つけると、そこで他人の残りものをもらったり、なやのすみでねかしてもらつたりするためにはちばんつらい仕事を引き受けました。しかしはげしい労働のためにはふたりはひどく弱つてきましたので、そうなるも、もう

だれもかれらを使つてはくれなくなり
ました。やむをえずふたりは道ばたに
立ってこじきをしなければならなくな
り、旅人のすがたを見ると、悲しそ
うな顔をして、あわれっぽいことばを
ちかけ、昼、野原の木の下で食事を
しているひやくしよの一家に出あう
そばへ近づいてパンのひとときをねだ
るのでした。そうしてふたりは小川の
ふちにすわって、口をき
く元気もなしに、だまってそれを食
べるのでした。

ある日、ふたりの悲しい身の上
ばなしを聞かされた宿屋の主人は、
ふたりに向かつて「わたしはむすめ
をなくした人を知つ



ているが、その人はパリでそのむすめ
さんにめぐりあつたそうだよ。」と
教えてくれました。そこでふたりは
すぐにパリをさして歩きはじめまし
た。ふたりがこの大きな都に足をふ
み入れたとき、その広くて大きなこ
と、町を歩いている人の数の多いこ
とにすっかりおどろかされました。
それでもふたりは、こんな人々の中
にこそ、きっと自分の子がいるにち
がいないのだと思ひました。しかし
それをさがし出すにはどうすればい
いのでしょう。それに、たとえむす
こに出あつても顔を覚えているか
が心配です。ジャンを見失つてから
ちようど十五年めだったからであ
ります。

ふたりはあらゆる広場を、あらゆる
通りをたずねまわりました。人だ
かりのする場所ではかならず足を
止めました。神さま

のごじ悲で、ぐうぜんめぐりあうことがありますようにと心の中
で念じながら、こんなふうには、老人夫婦があてもなくほつ
き歩いてゐるすがたは、あまりに悲しそうで、あわれまひいた
めに、ふたりが手を出さない前に人がほどこしものをくれるほ
どでありました。日曜日がくると、ふたりはいつも教会に出か
け、入口のところ立って、出入りする信者たちの顔をながめ
て一日をすごしました。ときどき見覚えのあるような気のする
顔に出あうことがありましたが、たずねてみると、いつもふた
りの思いちがいでした。

ふたりがいちばんよく通ったある教会の入口に、信者たちに
聖水をさし出してお金をもらうひとりの老人がいました。ふた
りはその人と友だちになりました。その老人も、話を聞くとた

いそう気の毒な身の上の人で、そのためにかれらはいっそうな
かのよい友だちになりました。

そのうちにかれらは、パリの町はずれにある、大きなアパー
トのてっぺんの、みすばらしいへやを借りて、そこで三人いっ
しよにくらすようになりました。そして車だいくは、この新し
い友だちが病気のときは、かわりに教会に出かけて聖水のほう
しをしました。冬がきました。例年になくきびしい寒さでした。
そのためこのあわれな老人は死んでしまいました。

そこで教会の牧師さんは、へいぜいからその身の上ばなしを
きいてかわいそうに思っていた車だいくを、そのあとがまにや
とってくれました。

それからかれは毎朝、一日の休みもなしに教会へ出勤して、

同じ場所の、同じいすの上にすわって聖水のほうしをしました。かれは教会にやってくる人はどんな人でも注意してながめました。とりわけ彼は日曜日を小学生のように待ちこがれました。なぜなら、教会は、日曜日には一日中おまいりする信者たちでにぎわうからであります。

しかし教会のなかはいつもじめじめしているので健康に悪く、かれはしだいに弱ってきて、ひどく年がよってきました。その上ジャンにめぐりあえる希望は日一日とすくなくなつたのです。今ではかれは教会におまいりにやってくる人々とはすっかり顔なじみになりました。その人たちのやってくる時間や、いろろなくせまで覚えこみました。しき石をふむ足音でだれがきたのか聞きわけることができるほどになりました。

見なれない人がひとりでも教会にはいつてくると、かれにとつては大事件であるほど、毎日の生活が単調なせまいものになつていました。

ある日のことでした。今まで見たことのないふたりの女のひとがやってきました。ひどりは年よりで、ひどりはわかひむすめさんでした。たぶん、母親とむすめにちがいありません。少しおくれてまたひとりのわかひ男がやってきました。おまいりがすみますと、さっきのふたりと、この青年とは教会の入口でしたしそうにあいさつをかわしました。それから青年は車だいくから聖水を受けとって、ふたりの女の人にさし出し、それから老婦人のうでをかかえて出ていきました。

——きつとわかひむすめさんのいいなづけにちがひない、と車

だいくは思いました。

それからかれは夕方まで、きょうのわかい男によく似た人にむかしあったことのある記おくを、いろいろと思ひ出そうとしました。しかし雲がかかったようで、どうしてもはつきりと思ひ出せません。この同じわかものはそれからたびたびふたりの婦人と一しよにやってきました。そのたびごとに車だいくはなにかしてはつきりと思ひ出そうとするのですが、むかしどっかで見たことがあるような気がするだけで、どうしてもつきとめることができないのです。そこでかれは自分のおとろえた記おくを助けるために、おかみさんを連れてくることにしました。ある夕ぐれ、日がしずむころ、例の見しらぬ人たちは、三人そろって教会へやってきました。かれらが前を通ったとき、

「どうだい、おまえに見覚えはないかい。」

と、車だいくはいいました。

おかみさんは、同じように思ひ出そうとあせっていましたが、不意にかの女はささやくような低い声でいいました。

「そうだわ……そうだわ。……でもあのわかい人はかみの毛はもっと黒いし、せも高いし、それにしん士さまのようなりっぱな身なりをしている。けれど、どうさん、あの人はあんたのわかいつ分の顔とそっくりですよ。」

車だいくの老人はそれを聞いてとびあがりました。全くそのとおりでした。そのわかいものは自分に似ていました。死んだ自分の兄にも似ていました。自分の覚えている、わかいころの父にも似ていました。老人の夫婦はおたがいに口がきけないほ

ど感動していました。三人の人たちはおまいりをすませてもらい、うど門を出ようとしていました。わかものは聖水をかける道具に指をふれました。そのとき老人はぶるぶると手がふるえるために聖水を雨のように地面にふりまきながら、低い声で、「ジャン」とよびました。わかものは足をとめて老人の顔をみつめました。老人はいっそう低い声でもう一度「ジャン」とよびました。

ふたりの婦人はびっくりして、老人の方をふりむきました。そこでかれはすすりなきながら三度めに「ジャン」とよびました。わかものは老人の顔に息のかかるほど体をかがめましたが、おさない時分の記おくにはっとして答えました。

「パパのピエールに、ママのジャンヌ？」

わかものは自分のおとうさんの名まえも、何もかもすっかりわすれていました。

しかし小さい時分にあんなになんどもくりかえしていった、「パパのピエール、ママのジャンヌ」というふたつのことばだけは、いつも思い出すことができたのです。かれは老人のひざにとびついて、その上に顔をうずめました。そしてなき

続けました。思いがけない大きな喜びにのどをつまらせている両親をかわるがわるだきしめながら。

ふたりの婦人も、またなっていました。大きな幸福がやってきたことをさどって。



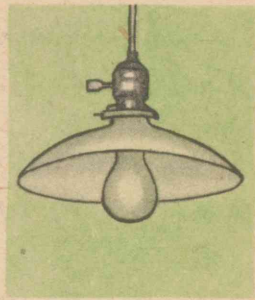
それからみんなそろってわかもの家に行きました。ジャンは両親にその身の上ばなしをしました。

サーカスの一行がジャンをかどわかしたのでした。三年の間ジャンはたくさんの国々を流れ歩きました。それから一ざは分散しました。その時、あるりっぱな家に住んでいる老貴婦人がお金を出してジャンを手もとに引きとってくれました。かわいらしい子どもだったからです。その上、かしこい子どもでしたから、学校へやってもらいました。だんだん上の学校へ進みました。この老貴婦人には子どもがありませんでしたから、ジャンはたくさんの財産をゆずられました。ジャンの方でもまた両親をさがしていたのです。しかし、「パパのピエール、ママのジャンヌ」というふたつの名まえしか思い出せないジャンには、

両親をさがし出す手だては全くみつからなかったのです。ジャンはおよめさんをもろうところでした。あのわかい美しいおすめさんはやっぱりジャンのいなすけだったのです。

こんどは老人夫婦が、いままでのつらい悲しいものがたりをしました。それがすむとかれらはもう一ぺんだきあいました。

その夜は、夜のふけるまで、みんなて話し続けました。いままでかれらの手からにげまわっていた幸福が、かれらのねているまにまたもやかれらをすててにげ出しはしまいかと心配して、かれらはねるのがこわいのでした。しかしこんどはもうだいじょうぶです。不幸をすっかり使いはたしていたので、かれらは死ぬまで、幸福にくらすことができました。



四 工夫と發明

(一) 電灯の消えたとき

(1)

仁一君は、今夜も復習をしていました。台所で、ことごとく音がします。おかあさんは、いつも、仁一君が作った電気パン焼器で、パンを焼いてくださるのでした。

仁一君はもう終いに近づいていた勉強に一だんと力をいれて、とうとうすましてしまいました。そして立ちあがったとたんに、電灯がパツと消えました。「おや」というのと同時に、台所からも、「あら、困ったわね。停電かしら。」

というおかあさんの声です。仁一君はがらがらと雨戸をあけて、外を見ますと、前通りの家は何事もないようです。二丁目の通りも何事もないようです。

「おかあさん、停電じゃありませんよ。うちだけですよ。」

「まあ、そう。じゃヒューズが切れたのね。きっとパン焼きで無理がいったのよ。」

仁一君の研究では、電気パン焼き器を使っていると、スイッチを入れてからしばらくすると、電流が最大になるといふことがわかっていました。おかあさんはそれをござんじでした。

「ぼくがなおしましょう。」

理科の大すきな仁一君は、じっとしていられません。すぐにねじまわしとヒューズを持ってきました。そして台所の柱にあ

る安全器を開いてみました。思ったとおり、安全器の中のヒューズが切れて、せと物で作ったふたの内側は黒くすすけています。うす暗いろうそくの光をたよりに、やっとねじをゆるめて、新しいヒューズをつけかえ、もう一度中を確かめました。

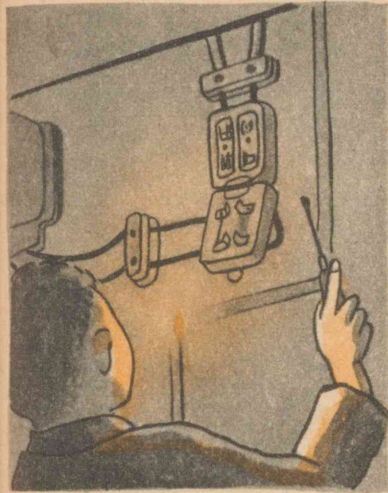
「これでよし——。それからおかあさん、パン焼き器は、はずしてありますね。」

注意深くふたをもとにもどして、くっとおすと、パツと電灯がついて、まぶしいように明かなくなりました。

「えらいわね。」

「感心、感心。」

おかあさんやねえさんがほめました。



た。

「なんでもないよ。こんな事ぐらい——。」

仁一君はちよつとはずかしそうでした。

(2)

それから、なん日かたったある日、仁一君が勉強していると、姉の絹子さんがよびにきました。

「仁一さん、きてちようだい、わたしのへやの電気スタンドがどうしてもつかないのよ、電球は何ともないの……。ほかへつけるどつくのよ。」

「じゃあ、見てあげよう。」

仁一君が絹子さんのへやへ行ってみると、まっ暗です。スタンドを手に取って、電球をすかして見ましたが、なるほど心線

は切れていません。

「フィラメントは切れていないし、ぼくの所はついていいるんだから、停電じゃないし、安全器でもないし——」。

スイッチか、コードにちがいないと見当をつけました。それで、まず、スタンドのスイッチをパチパチやってみましたが、何ともありません。そこで今度は、てんじょうから下っているコードと、スタンドのコードをつなぐソケットプラグを調べました。

「プラグ」が少しゆるい上に、さびていたのです。この接しよくが悪かったので、仁一君は、プラグの二本の金属へんをやすり紙でみがいて、間をちよつとひろげました。そして自信たっぷりで、元通りにさし込んでスイッチを入れました。

「つかないわよ。」

ねえさんが答えます。

「おや、変だぞ。」

あわてた仁一君は、そのスイッチを二三度パチパチやりましたが、やはりつきません。そのうちに仁一君は別の発見をしました。コードをソケットにとりつけてある所が、何だかぐらぐらしているような気がするので、ここだなと思ったので、ソケットの上がわをねじではずしてみますと、果してコードの一方がとれていました。

「ここですよ。ねえさん。」

故しよを見つけた仁一君は、それを直そうとしましたが、ここには電気がきているはずです。うっかりさわったら、ピリ

ビリとします。死ぬほどの事もないでしょうが、氣持のよいものではありません。また、このコードのはしが一方のコードにさわったりすると、それこそすごいスパークを出して大変です。ここを直すには、どうしても電気をとめなくてはなりません。それには、安全器のふたを開けばよいのです。

「おとうさん、ちよつと暗くなりますよ。」

といつてろうそくをつけた仁一君は、台所の安全器のふたのひもをぐつと引きました。電気の大元を消したので、家中の電灯が一時に消えてしまいました。その中で、うす暗いろうそくの光をたよりに、コードの先を切つてつけかえました。

「よし——」安全器のふたをもとのようにもどしました。家中がパツト明かるくなりました。ところが絹子さんのスタンドはと

見ると、まだ消えたままです。

「おかしいな。電球、スイッチ、コード、プラグ、みんな故しようがない。安全器はむろん大じょうぶ。わるいところはなはずだが。」

念のためもう一度、全体を調べてみましたが、わかりません。

仁一君は、てんじょうからたれてゐるコードをにらんで、考えこんでしまいました。

「すると、あれかな。」

てんじょうにコードをとりつけたせともの台がついています。残るところはそこだけです。仁一君は、つくえの上にしかけを持ってきて、その上にあがりました。

その台のふたをひねりますとわけなく動きます。注意深くま

わしていただきますと、ようやくはずれて中が現われました。そこにも細かいヒューズが仕かけてあります。それが切れていたのでした。

「ああわかった。ねえさん。スタンドを動かす時、さっき、コードのところパチツと火花が出たでしょう。」

「ええ、そういえば、音がしたわ。」

「その時、ここが切れたのです。」

やっと原因をつきとめた仁一君は、うれしくてたまりません。また安全器をはずして電流をとめ、ここのヒューズを取りかえました。

「今度こそ——」と安全器をもどす仁一君は、それでもちよっと心配でした。

いつものようにふたをぐっと元へもどすと、パツとねえさんのスタンドにあかりがつきました。

(二) ものいうおもちゃ

アメリカ合衆国ボストン市のろうあ学校に、ひとりのわかひ先生がいました。小さい時から、どこか変わったところがありました。おもちゃが大すきで、それをあたえておけば、一日中ひとりで遊んでいます。だんだん成長すると、人の顔さえ見れば、「なぜ」「どうして」。どうるさくたずねるようになり、これにかまったおとなは、すっかりかぶとをぬいでしまふのでした。そのうちに、も型機械に興味を持ちはじめ、くだいたり組み立てたりすることが、三度の食事よりもすきになりました。

千八百四十七年、スコットランドに生まれ、少年時代をそこで過ごしました。この先生が、まだ十五才の少年であったころふと、人間の声というもののふしぎさに気づきました。

「人間は、くちびるや舌を動かして、いろいろ変った音声を出す。が、考えてみると、じつにふしぎだ。」

少年の「なぜ」「どうして」は、ついに研究の糸口をしつかりとつかんだのです。それからむちゅうになって、みょうなものを作り始めました。まる一年かかって、やっとできあがりました。それは、人間の頭のようなもので、ふいごで風をふきこむと、ゴムのくちびるが動いて、生きた人間のように声を出すしかけになっていました。

二十才を過ぎたころ、両親と共に本国をはなれて、はるばる

カナダへ移住しました。この地で、耳の聞こえない人、口のきけない人の教育を始めましたが、たいへんに成績がよくて、間もなくボストン市からよばれ、そこでろうあ学校の先生をするようになったのです。

先生が十五才の少年だったころの、あのみような実験は、その後決してわすれることができませんでした。ろうあ学校で気の毒な子供たちを教えるようになる、いよいよ熱心に、声の原理や、舌、くちびる、耳などの生理を勉強しました。

しかし、何といっても、耳や口の不自由な子供たちのことですから、教える方も教えられる方も、なみたいていの苦心ではありません。先生は、なんとかしてこのかわいそうな子供たちのために、便利な機械を作りたいと思いました。そうして、話

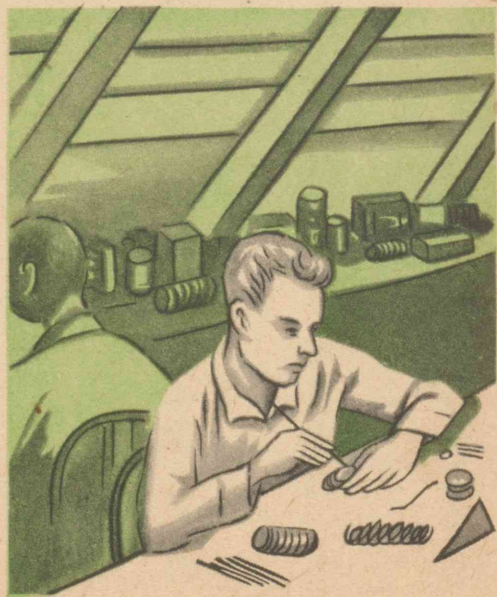
をする時におこる空気のしん動を、目で見る機械の工夫をした
り、または、そのころ評判になっていた、電信機械を研究した
りしました。

そのうちに、ふと別の考えが、先生の頭にうかびました。

「電信は、電気的作用によって、点やぼうのふ号を用いて通信
するものだが、このふ号の代りに、人間の声を用いることは
できないものか。」

これに思い至ると、先生はもうじつとしてはいられませんでした。
すべてをすてて、トーマス・ワトソンという助手といっ
しよに、ボストン市のある電気屋の屋根うらにたてこまりました。
た。そうして、話と電気とを結びつけようという、ふう変りな
研究にとりかかったのです。

ところが、もともと電気や電
信の学者でもない先生のこと
すから、研究は時々行きづま
りました。その度に、専門の学者
にすぎったり、友人に意見を聞
いたりしなければなりません
した。なかには、その研究をば
かにして、



「おやおや、また『ものいうおもちゃ』の話かね、電気に話を
させようなんて、とんでもないことだよ。」
と、相手にしてくれない友人もありました。

命がけの研究が行きづまった上に、友人にまで気がいあつ

かいにされたのでは、気を落とさずにはいられません。けれども先生は、こんなことに負けてはならないと、自分をはげましく続けました。

二十八オの時、用事があってワシントンへ出かけたことがありました。そのついでに、有名な電気学者のジョセフ・ヘンリー博士をたずねました。そこで、自分の考えをくわしく話してから、

「しかし、先生、私にはこの研究を完成させるのに必要なだけの、電気についての知識がありません。」

と、うなだれていうと、それをしずかに聞いていた博士は、七十八オの老人とも思われぬいするとい声でいいました。

「いや、君は今、大発明をするかしないかのせとぎわにあるの

だ。君はまだわかいのだから、必要があればそれだけ勉強したまえ、いやいや、君はどうしても、もつと勉強しなくてはいけない。」

日ごろ尊敬していた大科学者の口から、それほど熱心にはげまされた先生は、生きかえった思いでボストン市に帰りました。それからというものは、周囲の人々のそしりなどには、耳もかたむけませんでした。二階の屋根うらにとじこもったまま、朝からばんまで、ぶっ通しの勉強を始めました。心のくじけそうな時には、あの大科学者の、熱心なするどい声を思い出しました。

ある日のこと、先生は、知りあいの医者から人間の耳をもらってきました。そうして、気味の悪い実験を始めました。まず

一本のわらを持ってきて、その一方を耳のこまくにふれさせ、他の一方をすすのかかったガラスの上に置きました。先生は、その耳に向かつて息をふきかけたり、歌を歌ったりしました。すると、その度に耳のこまくがしん動して、わらがかすかに動きます。そうして、すすのかかったガラスの面には、ぎざぎざの線がえがき出されるのでした。

そのようすを注意深くながめていた先生は、このこまくの代りに、うすい鉄で円板を作って、それを電気でしん動させたらどうかと考えました。この考えこそ、やみの中にさしこんだ一すじの光明でした。

月日はどんどん流れました。あの気味の悪い実験から、やがて三年めの夏がやってきました。研究室のまどの外には、木々

の葉が一日一日と緑を増して、風にそよいでいます。

きょうも相変わらず、はりがねや、じしゃくや、時計のぜんまいなどを取りつけた機械を相手に「ものいとおもちや」の研究に余念がありません。となりの室では、助手のワトソンが、先生の機械と電線でつないだ、別の機械を調べています。

その時です。「ポーン」といがかすかな音が、電線を伝わって先生の機械にひびきました。先生はびっくりして、とびあがりました。そうして、顔色を変えてワトソンの室にかけこみました。

「君、君、今何をしたんだ。その機械を動かしてはだめじゃないか。」

とどなりながら、機械にかけ寄りました。先生の手はふるえています。

「ものいうおもちゃ」は、ついに電線によって、かすかながらも音を伝えたのです。研究はもうひと息です。

血の出るような苦心が、それからまた続けられました。

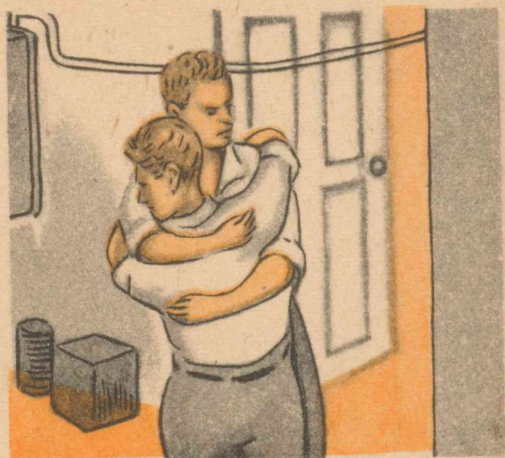
やがて年が変り、とうとう「ものいうおもちゃ」のできあがる日がやってきました。

きょうこそ、その実験の日です。

先生は機械の前に立ちました。やがて、少しふるえをおびた先生の声が、機械に向かって話しかけます。

「ワトソン君、用事があるから、すぐきてくれたまえ。」

耳をすまして待っていたとなりのワトソンは、その時、思わず機械を取り落してしまいました。声です。人間の声です。人間のことばが、先生のことばが、はりがねを通してほんとうに



聞こえたのです。ワトソンは、むちゅうで先生の室にとびこみました。

「聞こえました。聞こえました。先生のことばが、いちいちはっきり聞こえました。——先生。」

ふたりは、はげしくだきあいました。うれしさのあまり、声をあげてなきましました。

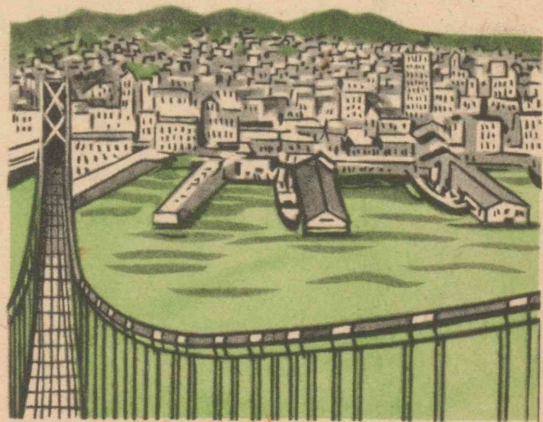
これは、千八百七十六年三月十日のことです。「ものいうおもちゃ」とは、いまでもなく電話です。電話を発明したこの先生こそ、アレキサンダー・グラハム・ベルで、この発明は、ベルが三十才の時のことでした。

五世界の旅

(一) アメリカの町々

私たちを乗せた太洋丸は、朝暗いうちに、サンフランシスコの港外に着きました。

初めて見る外国の地は、ただおどろくばかりです。何を見てもきれいでめずらしく、高く大きな商店がのきを連ねています。町通りは自動車が多く、スピードがあるために、通りを横切るのはいへんです。それに町はばが広く、電車通りには八本のレールがあ



って、四台の電車が往復しています。どこを見ても人がいっぱいです。港の入口に、ゴールデンゲートパークという、大きくて美しい公園があります。町通りには、日本人の経営する商店もたくさんありました。

夜行列車でサンフランシスコを出発し、ロスアンゼルスに向かいました。ここに一ぱくして、市中を見物しました。サンフランシスコよりも大きく、ずっときれいでした。

いよいよ、アメリカ大陸の横断旅行です。まどの外のけしきは絵のように美しく、農家で作っている花畑や、野菜畑も広々としてきれいです。汽車はものすごいスピードで走ります。時間がたつにつれて暑くなってきました。まどの外にはもう家も木もなく、ただすな地ばかりです。明けてもくれてもただすな

地です。すなほこりがはいるので、まどはあけられませんが、五日めによく、シカゴ市に着きました。ここでまた一ぱくしました。世界一といわれる、家ちくのと殺場を見物しました。ここで牛、馬、ぶたなどが、毎日何千頭と殺されるそうです。シカゴは工業がさかんで、大工場のえんとつが無数に立ちならんでいます。汽車は三十何か所に向かって発着しています。近くのミシガン湖には、大きな汽船がいくつもはいていました。あの有名なナイヤガラの大ばくふも、ゆっくり見物することができしました。

その日の夜行列車でナイヤガラ駅をたち、あくる朝、ニューヨーク市に着きました。

ここは、アメリカ第一の大都会です。今まで見てきたどの町よりも、いちばんにぎやかです。自動車もずっと多く走っています。地下鉄がものすごいスピードで走ります。レールが四本で、外側の二本がふつう、内側の二本が急行になっています。

高か鉄道も走っています。このように、交通機関の系統が、実によく整っています。世界最高のエンパイアステートビルが、空高くそびえ立つのを見あげただただおどろくばかりでした。さすがは、アメリカ第一の大都会であると感心しました。

ここに五日ほどいて、市中の



名所を見物してまわりました。いよいよ、アメリカとも「さようなら」です。

大西洋の快速船モーレタニア号に乗って、久しぶりにまた、船の旅を続けます。生まれてはじめて見るイギリスを、いろいろと想像してみました。

(二) イギリスの工学

イギリスのサザンプトン港から夜行列車に乗り、次ぎの朝、ロンドンのウォーターロー停車場に着きました。改さつ口の中で少し待っていると、汽車に預けておいたトランクを駅員がおろしてきて、氏名の頭文字で分けてホームに積みます。赤ぼうがそれを運び出して自動車に乗せます。荷物の預かり証はない

から、乗客はかってに自分のトランクを受け取るのです。

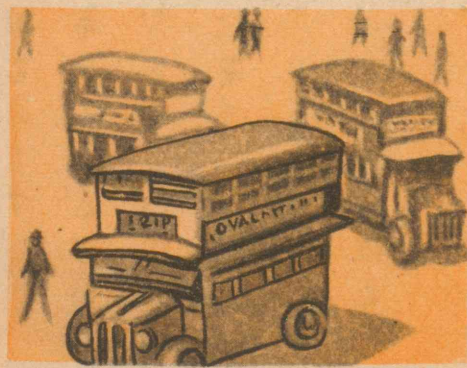
「これで一度だつてまちがいのないのが、イギリスのえらいところだよ。ほかの国でこんなことをすれば、まちがったりぬすまれたりするけれど、ここでは、めったにそういうことはないのだよ。」

おとうさんは、上陸第一歩にイギリスのいいところを教えてくださいました。

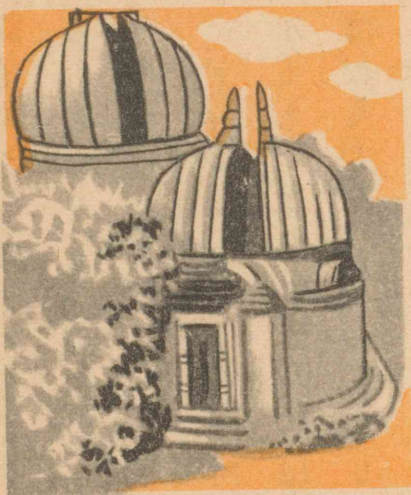
タクシーをよんで、夜のロンドンを走らせ、バッキンガム宮でんの前を通って、ロイヤルパレスホテルに着きました。ホテルは、ハイドパークと地続きの、ケンジントン公園の前です。久しぶりに大きなベッドで、のびのびとねられます。

次ぎの日、ロンドンを見物しました。ロンドン市はイギリス

の首府で、世界一の大都会です。市中至る所にバスが通っていて、かなり遠くのこう外までのびています。このバスは赤色で、二階つきですから目立ちます。上下で六十人ほど乗れます。おもしろいことには、雨のふる日など、一階がふさがっていても、二階へあがってこうもりがさをさしている人があります。おかしいと思つたら二階はたばこがふかせるからだそうです。おりたい時には、階だんのあがり口にボタンがあつて、それをおすと止めてくれます。きつぷは車しようにわたさないで、すてていきます。万事ほんとうに世話のないようにできています。



ロンドンの東の方には、グリニツチのおかがあります。テムズ川が目の下を流れていて、そばには大公園があります。その公園のおかの上に、有名なグリニツチの天文台がありました。世界地図の上に、子午線れい度とした場所は、この天文台です。ここは、太平洋をハワイに行くところに通つた、百八十度線のちようどうらに当ります。天文台

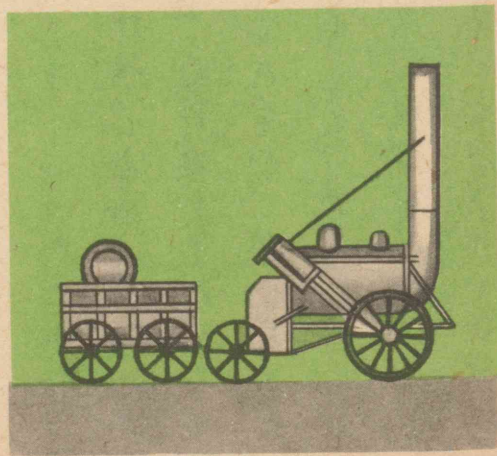


の庭に、コンクリートで長い線をかためて、そのまん中に、南から北へと向かう線が一文字にほってありました。これが子午線の印です。ほんとうの子午線は、室の中に白金で作ってあります。そのほか、天文台に

関係のある機械がたくさんありました。ここが地球の表面を測るものになるのかと思うと、ゆかいな気持になり 記念写真をとりました。

ケンジントンという所には、博物館がたくさんあります。なかでも、工科の博物館はすばらしいと思いました。ここは器械ばかりで、いろいろの模型ができています。たとえば、船の所で、電気のスイッチをかってにおすと、船の機械やスクリューが動きだします。また飛行機の所では、プロペラが回転します。自動車も動かせます。ポンプもあれば、レントゲンもあります。なんでも自由に実験ができるし、わからない事は番人が親切に教えてくれます。ずっとむかし、ライト兄弟が考案したという古い飛行機もありました。形はちょうど、こもりか鳥のよう

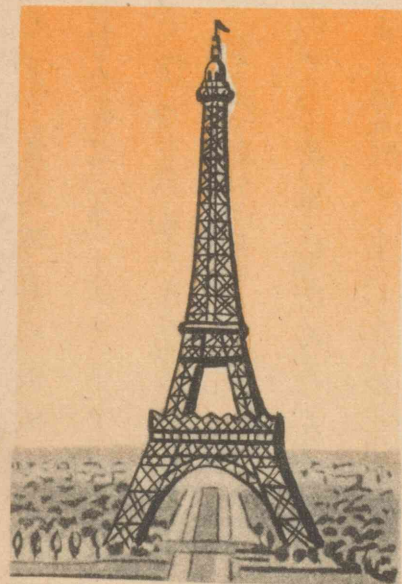
です。電送写真の機械もあり、また歴史上有名な、スチーブンソンがはじめて作って、イギリスで動かしてみたという汽車もありました。ごく小さなもので、荷車にかんたんな機関をつけたような形です。なお、最新式の電気機関車もあってなかなかりっぱなものです。が、これまでに発達するものを発明したスチーブンソンは、ほんとうにえらい人だと思いました。



(三) フランスの美術

パリにきて、だれでも第一に目につくのがエッフェルとうで、

す。市の中心を流れるセーヌ川のほとりに、三百メートルも高とそびえているので、世界の名物となっています。どうは、エレベーターでかなり上まであがれます。じょうぶな鉄のようですが、あがるとゆれるような感じがします。パリの全市はもちろん、フランスの大平野がひと目に見えて、ゆう大なけしきが展開します。どうの下部は、

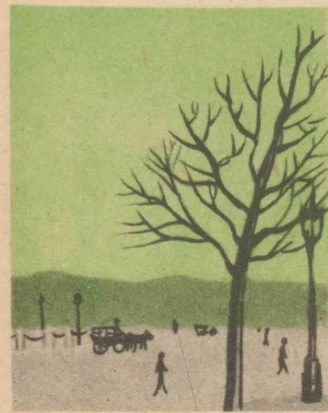


大きなアーチになっています。ある時、飛行機でこのアーチの中がくぐれるか、くぐれたら賞金を出そうと、アメリカの人がフランスの飛行家とかけをしました。それがラジオや新聞で

伝えられて、大評判になりました。あるゆうかな飛行家が、これに応じました。いよいよその当日は、たいへんな見物人かどうかのある公園に集まり、息をころして飛行を待ちました。はたして成功するかどうかで、大きわぎでした。しばらくすると、空の一方に、飛行機のばく音が聞こえ、その軽快な機体を現わしました。やがて、どうをねらってぐんぐんどう下し、附近の屋根とすれすれにとんで、スーッとどうのアーチを通りぬけました。観衆はそのみょう技にすっかり舌をまいてしまいました。ところが、エツフェルどうのちよう上から、ラジオ放送用の太いアンテナ線が地上に引いてあったのです。アツといまに、それにひっかかってしまいました。飛行機は地上につらくして、ばく発と同時にもうもうと燃えあがりました。すぐ救

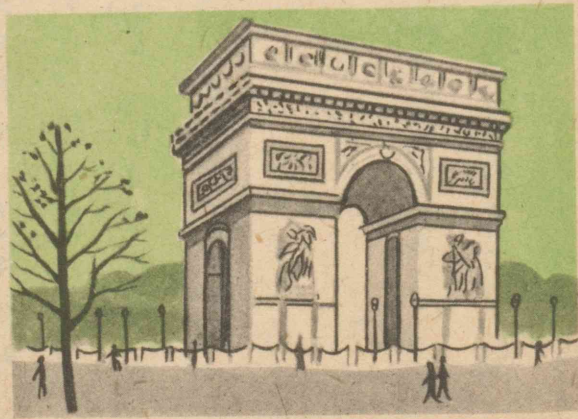
助にかけつけましたが、この勇士はついに絶命しました。
エツフェルとうには、まだこのほかに、いろいろな話のこ
つています。

パリは、家の建てかたも、ならびぐあいも、広場や公園など
の配置も、すべて美術的です。町通りは、たてから見ても横か
ら見ても、また空から見おろしても美術的です。有名ながいせ
ん門から四方八方に、美しい大通りが星
の形に走って、シャンゼリゼーの大通り
にのびています。コンコルドのゆう大な
広場にならぶチュイルリー公園、公園に
そって走るリボリーの、どうどうたる五
六階の石造の大家屋が、同じ高さできち



んとならんでいる美しさは、世界に類が
ありません。これに続くブアンドームの
円形の大広場、世界一の高級なほう石・
そう身具を売る商店、会社、ホテル、四
階くらいまでのびのびとしげったがい路
じゆ、グランブールバールの四季のなが
めは、世界無比でしょう。

パリは、形のうえでこんなに美術的で
あるばかりではありません。ルーブル絵
画館、ルクサンブール美術館、ロダンの博物館等があつて、世
界的な画家やちようこく家の大けつ作が、古代から近世まで何
百もそろっています。そうして、グランパレーやブテイパレー



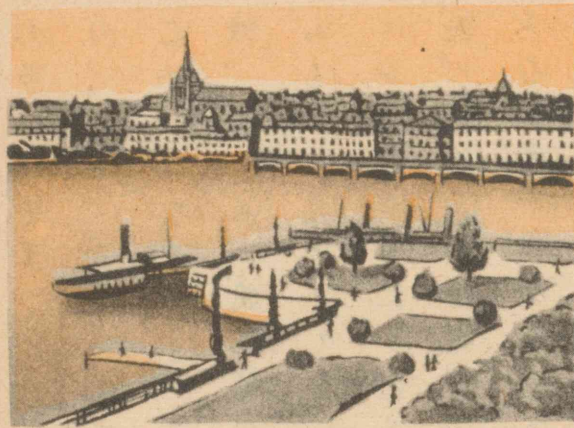
の常設美術館では、年中展らん会がもよおされて、現代の画家の作品を見ることが出来ます。だからパリは、まったく美術の町です。

パリの人々は、こういうかんきょうに生まれて、子供の時から古今のけっ作に親しんで育ちます。だから、線と色とについて特別の感じをもっています。女中などでも、ちよつと何かの説明をもとめると、すぐにじょうずなデッサンをかきます。

(四) スイスの風景で

自動車でパリをたつて、フランスの大平野を走りました。小さないなかの町や森などを左右に見過ごして、その日のうちにジュネーブ市にはいりました。大きなラック・ラモンの湖辺に

ある。けしきのよい都会です。アルプス山脈が目先の先に見えて、じつにそう快です。土地の人の案内で、市のこゝ外までドライブをしました。ここでまず感心したのは、町の衛生設備がよく



ゆき届いていることです。至る所清潔で、道路にもしばふにもちり一つ落ちていません。また、道路で子供が遊んでいないことです。車道を子供が歩いていたために、車がストップしたなどという決してありません。その上、自然を愛する国民なので、すずめ、うぐいすなども人をこわがらず、私たちのそばに寄ってきてにげようとしません。スイスは花

の多い所です。どんな家にも、まどには花のはちがかざってあり、二階・五階のまどにも草花がのぞいていて、自然に心がなごやかになります。スイスはまた、とけいの製造や、細かい機械、レース、薬品等の製造が盛んで、それらの工場が自動車からもよく見えました。

ジュネーブに一ぱくして、そのあくる日ベルン市に行きました。スイスの首府で、ここも風景のすばらしい所です。いろいろな役所や名所を見ましたが、特にこの町では、レースの製造がヨーロッパでも有名だということです。とけいも品質の良いのが多量に生産されます。水銀やアルコールを使わないで、金属ののびちぢみで温度を知る、かい中どけい型の寒だん計。むねにぶらさげて歩けば、歩いたきよりが自然にわかる歩度計。

山にのぼれば、自然に高さを示す高度計、そのほか、いろいろなめずらしい品物があります。

スイスは、「ヨーロッパの屋根」といわれて、ヨーロッパでいちばん高い所です。アルプス山脈には、五千メートルほどの高い山があつて、スイスの雪どけの水は、東はドナウ川となつてオーストリー・ハンガリー・ルーマニアと、いくつもの国を流れて、ソ連の向い側まで行きます。また、北に流れるライン川は、ドイツとフランスの国境となり、オランダに流れます。また、西に向つて流れるローン川は、フランスの平野を南へ南へと走つて、マルセイユの近くで地中海へ流れこみます。そのほか、スイスの南部の湖水からイタリアに流れる川もあります。スイスの高い山のふもとには、たいてい牧場になっています。

スイスの牛には、首に大きなすずがつけてあります。それがチリンチリンと鳴って木だます音は、いかにも不戦国スイスの永久の平和を表わしているように思われます。しかもスイスのミルクの、クリームや、チーズや、バターは、とてもおいしいのです。だから、高い価で各国に売り出されています。少し山にはいれば、目のさめるようなお花畑があり、ひょうがが、手のとどきそりなところにながめられます。

(五) イタリアの古都

私たちの乗った夜行列車は、長ぐつのかっこをしたイタリア半島を南へ南へと走り続け、あくる朝九時ごろ、イタリアの首府ローマに着きました。

ローマは、紀元七百五十何年もまえにできた、古い都です。今から二千七百年もむかし、まだ今のヨロツバがひらけないうぶんにできたのです。その時代にあった宮でんだの、役所だの、住居などの遺せきが市内に残っています。宮でんの大きな石の柱や、土台石などがそのまま保存されています。早くから文明が開けて、美術、工芸、文学などが進んだのもここです。だから、古い大きな寺院や、名所がたくさんあります。世界に有名な絵画だの、ミケランゼロのちようくだのがたくさん見られます。ティベル川というイタリア第一の大川が町の中を流れ、七つのおかが古代ローマの町のまわりにあります。むかし、土人とライオンとを戦わせて見物した、コロセウムという、大きな三階建ての石造のとう技場も、半分以上こわれたまま保存

してあり、三千人以上一度にはいれる、カラカラという、大きな浴場のあともあります。浴場の大きな石のかべを見あげると、そのむかしのローマのすばらしさがしのばれます。また、カタコンブという寺院のあとに行くと、地の下の暗やみの岩に、せまい道がほってあり、かた側のかべのだんだんに、がいこつがたくさんならべてあります。ここは、むかしの墓なのです。ぼうさんがろうそくに火をつけて、そこを照らしながら案内してくれます。石だんをぐるぐるまわりながらおりて行



くと、地の底の池に出ます。そこはむかし、信者がかくれて集まった教会だったのだそうです。夏なのに、ぞうっとするほどの冷たさでした。



ローマのまん中に、バチカンという、大理石造りの町があります。ローマ法王がお住まいになっている所です。このほかなお、数えきれないほどの名所、旧せきがあるのです。ローマを見物するには、いく日あっても足りません。ローマを見なければ西洋の歴史はわかりません。ちようど、なら・京都を見なければ、日本の歴史がほんとうにわからないのと同じです。さて、私たちは、ローマから南へ行って

ナポリというけしきのよい港を見物しました。ベスビアス火山がすぐ近くにそびえていて、なんともいえないよいけしきです。そのまた近くに、ボンペイという町があります。ずっとむかし、ここは火山の大ばく発があつて、火山ばいやよう岩のために、何百年もうまっていたのをほり出した名所です。ヨーロッパには、どこの国にも地しんがないのですが、イタリアだけにあるのだそうです。ベスビアス火山は、今もなお、しずかにけむりをはいています。よく晴れた日など、ナポリの海辺に立ってそのすがたをおおぐのは、まさに天下の絶景です。

(六) インドの子供

インドの子供は、日本の子供より早く育ちます。インドには

何十もの人種があつて、ある人種はまったくはだしです。またある人種は、くつをはいています。ぼうしも、頭にまきつける白布も、人種によつてちがいます。子供でも暑さになれているとみえて、ずいぶん強いの見ました。その子は六・七メートルもあるぼうの先に、横にもう一本ぼうをくくりつけ、たくさんのせんとく物をかけて、それをささげて暑い日中をぶらぶら歩いていました。せんとく物を天日にかわかしっているのです。私どもは日しや病をおそれて、ヘルメットぼうに日



よけ目がねで、しかも朝夕だけしか外出しないのに、この子供たちは、日中ぼうしもかぶらずにそうしているのです。インドの人は、おとも子供もよく英語をしゃべります。だが、アクセントの弱い、みょうな英語です。インド語は、二百も種類があるそうです。面積も広いし人口も多いので、ことばもいろいろちがうのでしよう。

町角などで、小さな青い木の葉を二つ折りにした物に、ビンロウジュの実で作った食べ物を入れて売っています。子供もおとも、銅貨を出してこれを買います。そうしてなかみを食べては、ペツペツと道につばをはきます。ビンロウジュの実のしるが赤いので、そのつばが血のように見えます。これは、暑い気候にたえさせるためにくふうされた食べ物だということですよ。



六新しい足あと

(一) 原始林の明星

1

アフリカの夜はふけて、遠くでははげしい川の水音がひびいていた。ふと高いヤシの木の上をふりあおぐと、エメラルド色の星が、いっぱいに光りかがやいている。さっきのはげしい雨は、どこかにいってしまった。風がヤシの葉にさらさらと鳴りわたる。

シュバイワアーはかいちゆう電燈をまくらもとから引き寄せ、ふと、キャンプの外の不思議なけはいに耳をすました。か

れは、電燈をつけずにそばにぐっすりねむっている助手のロコ
のせなかを、そっとゆり動かした。するとロコは、暗やみの中
で、ハッと目ざめたらしく、声をひそめていった。

「先生、何かきてます。私もさつきから知っていました。ライ
オンかもしれないません。」

とからだをにじり寄せてくると、シュバイツァーの耳もとに口
を近づけていった。

「どうするかね。」

「だいじょうぶです。私が追っばらいますから……。病人は元
気になってるでしょうか。」

ロコが病人というのは、きのうの夕方、ロゴオヌヒル の部
落から連れてきたひとりのむすめで、熱病にかかっていたので

あった。そのむすめは、小さいこのキャンプのかたすみにつ
たヤシの葉のベツトに、かよけのふくろをかけて、日がく
れからは静かにこきゅうを続けていた。

そのそばに、父と母の土人が、ねむ
らずにすわりこんでいる。

「夜が明けて太陽が出てくると、き
つとよくなるだろう。心配しなく
ともいいんだ。それよりも、ライ
オンはだいじょうぶかね。」

「先生、電燈をお貸しください。ラ
ンプをつけますから。」
ロコは、シュバイツァーから電燈



をうけとると、キャンプのてんじょうからつるされてあるランプに火をつけた。老人の土人たちはすわったまま、さっきから、やはりライオンの近づいてきたのを感じていたらしく、目でロコにうったえていた。ロコはキャンプの外にはいだしていった。電燈を持って林を照らした。間もなくたき火がも燃はじめた。

シュバイツァーは、その後からやはり角ぶえを持って出ていった。ロコは草の上からだをふせて、しきりに電燈を照らしつづけている。シュバイツァーは、角ぶえをふいた。するどい角ぶえのひびきが、林の中に遠ざかっていった。

するとすぐ、シュバイツァーのそばのヤシの林の中から、地ひびきを立てて黒いけだものがとび出してきたかと思うと、た

き火とは反対の方角に走っていく。

ライオンだ。

ロコは、たき火の燃えさかるのを見ながら、三頭のライオンのにげていくのをじっと見つめていた。

「ロコ、あとはいないのかね。」

「あぶないところでした。もう五分もおそければ、キャンプはひとたまりもなくやられるところでした。先生、私が悪かったです。ロコはねむってしまったんです。」

ロコはそいいいながら、シュバイツァーの立っているそばにひざまずくとなみだを流した。ライオンの足音はもう聞こえない。

「いいんだ。そんなことを気にしなくなっただよ。君は

きのうは五十キロも歩いたんだもの。あのむすめをひとり救ったんだからね。もう少しおそれれば、あのむすめは死んでしまったのだ。君の強いからだがあったので救われたのだ。」

「いいえ、それは先生のためです。ロコは死にそうなるむすめをただおんぶしてここまで運んできただけにすぎません。」

「さあ、あのむすめにもう一度注しやしておこう。そして、ひとねむりしよう。ロコ、つかれていたのにすまなかつたね。」

「いいえ、私が悪かったです。あまりつかれて、つい、うとうとしてしまったのでした。」

「さあ、キャンプに帰ろう。」

今のさわぎで、土人のむすめは目をさましていた。しかし、熱がなくなっているので、すっかり元気づいていた。

「さあ。」

シュバイツァーは、おろおろするむすめのうでをやさしく取りあげると、静かに注しやのはりをうちこんだ。

ロコと、こうしてアフリカの土人の部落を歩きはじめてから、シュバイツァーは、もう十年にもなっていた。原始林をわたり川をこえて、かれも今は五十五才だった。一日として、ぐっすりねむったこともなく、ひとばんとして、まどらかなゆめをむすんだこともなく過ぎてきたのだった。

シュバイツァーは、まだたき火のそばに立っているロコのそばにいくと、その手を固くにぎった。ロコに生命を救われたのが、いくたびであろうか。シュバイツァーは、ふとなみだぐんで、高くきわまりない夜空をおおぎ見た。星はいよいよかがや

き、光りあいながら北に続いている。それは、シュバイツァーが旅立ってきた。十年前のヨーロッパの夜空にも続いているのだった。

「ロコ、休みましょう。」

シュバイツァーはロコの手をひく。

「はい、間もなく夜が明けましょう。星が光を増してきましたから。」

ロコは天をさした。

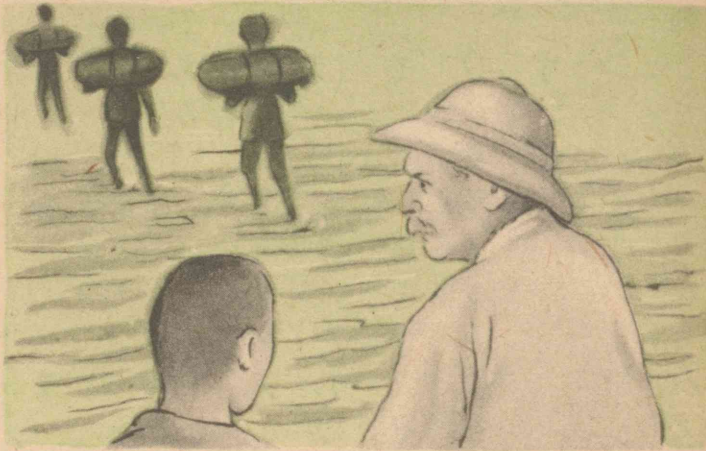
2

キャンプをたたんだのをせなかくくりつけた土人が五人、シュバイツァーの先に立って、しぶきをあげて流れる川の中の石を伝ってわたってゆく。

ここはコンゴ川の支流であった。この川はワニが多いことで、土人たちの間にもおそれられているが、きょうの土人たちは、そんなことは知らぬような顔をして、ゆかにいかに土人の歌を歌いながら歩いていく。

夕方までにサラ族の部落に着く予定だった。土人たちは、サラ族のものでシュバイツァーをむかえにやってきたのである。

ヤド湖は美しい湖である。しかし、川の中はワニがうようよし



ているのだから、うっかり石だと思って足をおろすと、それが
むくむくと動きはじめからあぶなかつた。

ロコは長いついで、水の上にわずかに出ている石は、残らず
こつんこつんとこづきまわしてから足を進めるといふ用心ぶり
である。

「ロコ、もうあの人たちは向こう岸にわたってしまったね。」

「はい、あの人たちは、命をそまつにすることを、何とも思っ
ていないのです。せつかく先生に病気をなおしてもらっても、
ワニやライオンに命をくれてしまうのが、たくさんなので
す。」

シュバイツァーは、この少年と歩きはじめてから、実に多く
のことをロコから教えられた。ロコは、シュバイツァーから、

手当をしたり、注しやをしたりすることを次ぎ次ぎ学び、シュ
バイツァーはロコからアフリカのことを学んできたのだった。
ロコは、ドイツ人のほう石と薬を売りにきた男と、サラ族のし
ゆう長のむすめとの間に生まれた混血児であった。父はもうな
くなって、ロコは母といっしよに、しゆう長の家の庭先に、別
の小さい家を建てて住んでいた。

川は、水の流れのはげしいのが、アフリカの特ちようだった。
石が水の上につき出しているかと思つと、深く青くふちがよど
んでいたりする。ロコとシュバイツァーが岸に着いた時、土人
たちは何やらわめきながら、しきりに手をたたいていた。そこ
には、マシの葉であんだかごが置かれてあつて、いままで見
たことのない土人が、四人もあらたに顔を見せている。かれらは

地べたにひざまずいてシュバイツァーをむかえた。それはサラ族のしゅう長が、かごでシュバイツァーをむかえに出ているのだった。



しかし、シュバイツァーは、キャンプの道具だけをかごにのせて、自分は土人たちといっしょに歩きはじめた。両手がかかえきれぬほどのビンロウジュのえだえだを、小さいさるがキイキイと声をあげてとびまわっているかと思うと、はねのまっかな小鳥たちがかたさきにとまったりする。

「ロコ、サラ族の部落はもうすぐだね。」

シュバイツァーはきいた。

「はい、もうすぐです。あのヤシの林をこえると、部落の土のへいが見えてきます。」

「どうしたんだらうかね。みんながかごをおろしてしまったようだが……。」

「あれは先生を乗せるためでしょう。部落にはいりますと、みんなが先生をむかえているんです。だから、少しだけ乗ってください。」

「いや、このままでいいこう。その方がいいよ。ねえ、ロコ。ぼくたちはみんなおなじ人間だから。かごには、からだのよいものを乗せよう。」

キャンプの道具をのせたかごと一行は、間もなく部落に着い

た。高い土べいがめぐらされ、そこには門に番兵が立っていた。門をはいると広い畑が続いている。畑の中の道のそばに、サラの部落の人々が着かざってならんでいた。この土べいは、むかし、土人がたたかい続けたころのなごりであった。ほかの部落から、せめたてられると、まず高い土べいで防いで、そのあいだ、土べいの内側にある広い畑に食べ物を作ってたてこもる。

しゅう長の老人、ロコの祖父にあたる人がやってくる。

部落は、ふえやたいこでひっくりかえるにぎわいだ。

今度、ここのヤシの木の林の中にシュバイツァーの病院が建つのだ。

3

シュバイツァーのキャンプに、ロコの母が、パンとカバの肉

の焼いたのを運んできた。かの女は、ロコがシュバイツァーにでし入りしてから、どんなにその成長を望んできたことである。

「先生、ロコのことにつきましてお願いがございました……」。

「そのいすにおかけください」。

「はい。先生、私の子は神の祝福をうけているのでしうか。」

この地に光る小さな星となることができましようか。」

「どんな人でも、それはできます。その人の心に、いつも、星となろうとするたましいのよび声が続いていたならば……」。

「ロコにはそれがございませうか。」

「りっぱにあると私は信じてきました。ロコ君は、今やサラ族の美しい星です。私は、ロコ君のような人が出てくるのをさ

がしもどめながら、このアフリカのおくをめぐっていたひとりの旅人にすぎません」。

「ロコを小さい星にしてやってくださいまし」。

ロコの母は、なみだをながしてキャンプを出ていった。柱をけずるおのの音や、歌声が聞こえ、そこからは、ヤシの木の林と原始林と川がながめられた。

「先生、最後の板が打たれますから、先生に出ていただきたいとのことです」。

ロコがやってきていった。

それは、はじめての病室のことであった。

シュバイツァーは畑をこえて、林の中に行く。そこには、どんどん柱がけずられていて、はじめての病室ができあがりかけ

ていた。

「ロコ、あの病舎の名はどうしよう……」。

「先生、こんな名前はいかがでしょう。星の病舎、ヤシの病舎、ピンロウジュの病舎といったふう

に……」。

「そうだ。ロコ、光という病舎もつくろうね」。

シュバイツァーは、その夜、はじめて静かにねむった。ロコがねむらずに夜明けを待つことも、これからはなくなるだろう。

シュバイツァーは、病院の一室で、



遠くの部落から病人があると知らせてくれば、喜んでロコと出かけていった。

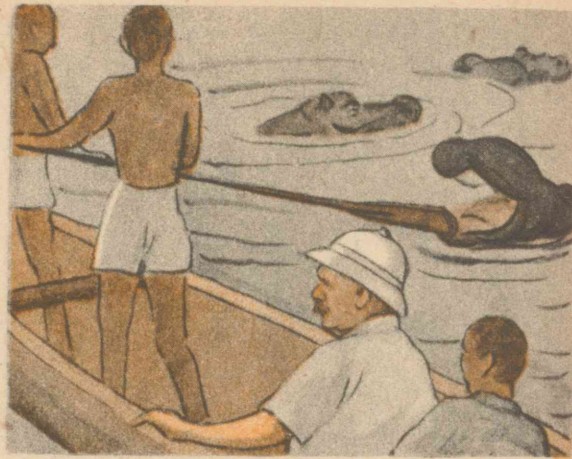
今は、ヨーロッパから、ふたりの助手もやってきた。

それは、暑い日の午後のことであった。

二十キロほどの川向この部落から、熱病の病人が三人ほど出たとの知らせで、シュバイツァーはロコを連れて出かけた。

川には、土人たちが丸木船をしたくしていた。三人の土人がその先にやりのついた、かいを持っている。それは、川の中でうようよしているかばをよけるためだった。

川のまん中に出ると、黒い岩のように、かばがむっくりと大きくなかを出しては、丸木船に近寄ってくる。すると土人のひとりが、やりをひらめかして、かばの鼻先をつきとばす。丸



木船の下がゆらゆら動いたかと思うとかばがひよいと船のそばに現われてくる。土人は目を光らせてさげぶ。

「ビフテキにしてやるぞ。いいか。ビフテキに——」

ロコは、やりをひらめかしてかばのせなかをひとつきにしようとする土人をおさえる。

「やめてくれ。おい、やめてくれ。病人の所に着くまでは、そんなことはやめてくれ。」

土人ははっと気がついたようにやりを取りなおすと、かいた方で水をかき、船を進めた。

「ロコ、君のいつかいつていた、命をそまつにするというのがこれだね。」
シュバイツァーは、こういつてえ顔をつくると、むねに十字を切った。

丸木の船は、かばがぽっかりぽっかりとすがたを現わす川の上を、やりのかいをまぶしい光にひらめかせながら進んでいった。川の向こう岸では、土人たちが手をあげながら、ホーイ、ホーイとよんでいる。

ロコが、丸木船の上でじっとひとみをすえながら、薬の調合法を書いた本を読み続けているのを見て、シュバイツァーは、このあれ果てた土地にもようやく新たな芽ばえが育ってきたと感謝するのだった。

(二) 南極のスコット

千九百十年十月、一せきの船が、オーストラリアのメルボルンに入港した。南極たん検に向かうスコットらに乗せたテラノバ号であった。本国イギリスを出発したのが六月。すでに地球の半分をまわったが、前とはこれからである。

スコットは千九百一年にも、南極たん検隊長となって、人間の知らない世界にはいり、そこで大きな陸地を発見したり、いろいろの調査をなしとげ、一度は極地に向かつてとっ進をはじめたが、食べものの不足からくるおそろしい病気のために、おしくも引返したのであった。

その後、北極には、はじめて人間の新しい足あとが印され残ったのは南極だけとなった。見わたすかぎり雪と氷の南極大陸を一日もわずれることのできなかつたスコットは、まえのたん検をさらにたしかめ、こんどこそ極地に達しようとかたく決心して勇ましく出発したのであった。

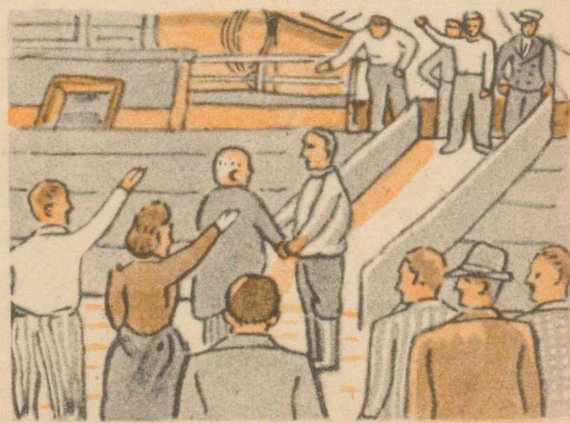
メルボルンに着いたスコットにとって、思いがけない知らせがあった。それはノールウェーのたん検家アムンゼンが、同じ南極をめざして、出発したというのであった。国をあげての熱れつな声えんに対しても、南極一ばんのりに成功しなければならぬスコットにとって、意外な競争者があらわれたのである。スコットの責任はますます重くなった。

十月二十八日、テラノバ号はニュージーランドのリトルトン

に着いた。ここは南極たん検の基地で、スコットはこのまえもここで最後の準備をととのえたのであった。

食りょうや燃料はもちろん、テント生活の用具や材料をはじめ、科学的調査のための機械器具など一切の積みこみを終り、全員船に乗った。隊長スコット以下五十三名、寒さに強いといわれる十九頭の小形の馬、二十三びきの犬、三台のモーターそりと、四百トンをはこべる石炭を積みこみ、準備はととのった。

十一月二十六日は、リトルトン出ばんの日であった。各地か



ら祝電が集まり、見送りの特別列車まで用意された。港内一ぱいとまった船のかざり、黒山のような見送りの人々、打ちふる手やハンカチ、ぼうし。その中をテラノバ号はすべるように港を出て行った。まもなく人間の世界と別れるのである。

長い長い大洋の旅が続いた。南い五十度近くなると、南半球の暴風が待ちかまえていた。十二月の初めには、めったにないひどいあらしに出会った。

わずか七百トンあまりのテラノバ号は、高さ十メートルもある大波と、ふきすさぶ風にもまれたが、全員力のかぎり、ゆれる船内をまわって、動き出す荷物をつなぎとめたり、流れこむ海水を必死になってくみ出したりした。ただ、はい色のアホウドリや、まっ白な雪海ツバメが、人間の苦しみを知らぬ顔でと

びまわっていた。

やっどあらしの海を過ぎると、うってかわった快晴の日が続いた。西の方はるかに氷山が一つ、まぶしい日光にキラキラとかがやくのが見えた。日のたつにつれてその数は増し、船はいよいよ氷山のむらがる南極の海にはいつて行った。

明けてもくれても、船は氷山と流水の間を進んだ。海はおだやかで、明かるい太陽に、氷山はうすべに色にくれかけ、かげというかげはむらさき色にかわる。夜中といっても、太陽は南の水平線にすんだばかり、北の方を見ると、空も水もバラ色にもえたち、やがてうすみどり色にくれかけていく。その美しきはこの世のものとは思われないほどであった。

すばらしいのは氷山のながめである。南極大陸からおし出さ

れた大きな氷のかべの一部が、次ぎ次ぎに分かれて北に向いてただよってくる高原のような氷山は、水面上の高さだけでも五六メートル、はばは数百メートルもあって、そのはしは、切りたったがけになっている。

ひょうきんなペンギン鳥が氷の上からキョトンと船をながめたり、ジャブンと水にとびこんでは、ヒヨッコリ水面に出る。アザラシが、大きなからだで水中をやのように泳ぎ、ペンギン鳥をとって食



べたりする。時には三十メートルをこえる白ナガスクジラが、すぐそばで、ゆうゆうとしおをふきあげる。一同は、苦しさをわすれて、めずらしいようにすに見とれるのであった。

その間にも時はようしやなくなつて、年もくれ近くなつた。海の氷は次第に小さくなつてきた。ついに最後の氷の流れを過ぎ七百キロの氷海を後に、広々とした南氷洋最後の海に出た。あと六百キロで、ゆめに見た南極の大陸、目ざすロス島の上陸地が待っているのであった。

「陸地だ、陸地だ。」
「陸地が見えるぞ。」

十二月三十一日の夜、けたたましいさけび声に、船のかんぱんは隊員たちでうずまった。夜といっても南極の夏の海、太陽の光は一面にあたりを照らしている。

「どこだ、どこだ」

目をこらして見ると、見える見える。待ちに待った南極大陸がくっきりと白く水平線上にういて見える。新年をつげる真夜中のかねの音と共に、船中は喜びの声で一ぱいになった。

新しい年も明けて二日、目的地ロス島は、いよいよはつきりと見えてきた。島の火山からふき出すけむりがななめになびき白一色の島のはしは、遠く水平線に続いている。喜びに勇む人を乗せた船は、次第に島に近ずき、島の西岸づたいにマーケットわんに入り、小さなみさきを上陸地点に選んだ。

一月五日、いよいよ上陸を始めた。馬、犬、食りよう、燃料、モーターそり、それから基地の小屋を立てるのに大切な建築材料などをあげる作業は一週間もかかったが、休むひまもなくす

ぐにつぎの仕事がはじめられた。

それは、基地の建設と、次ぎの年の春、南極にとっ進するための準備である。小屋の建築をはじめる一方、一月二十四日には、と中の食りよう貯蔵所を作るため、最初の旅行隊が出発した。

南極までの道は遠い。と中に中つぎの基地をいくつも作らなければならない、貯蔵する食りようを大急ぎで特別製のふ



くろにつめ、馬そりや犬そりに山と積んで基地を出発し、次ぎ次ぎと小屋がけをして、そこへ食りようをうずめるのである。氷のういているあぶない所を過ぎて、安全な氷原にあがり、二月初めには、第一、第二、第三の中つき所を、次ぎ次ぎに作っていった。ここで、弱った馬をひき返させ、スコットら七人は、さらに犬そり三台、馬そり五台をひきいて南に進み、月の半ばごろ、準備基地のうちいちばん南でいちばん大きな一トン貯蔵所を作りあげた。ロス島の基地からおよそ二百五十キロ、貯蔵所は雪を積みあげ、その中に食りよう、燃料、馬のかいばなどをうずめ、そのいただきに目印の旗を立てた。貯蔵した物が一トンあったので、この名がつけられたのである。

そのうちに、南極には冬が近づいてきた。二月は秋のはじめで、真夜中の太陽は南の地平線を横に動き、やがて低い太陽が一日のうち、わずか地平線にしずむようになる、冬の近づいたしるしである。

一トン貯蔵所を最後に、四月半ばまでには、一同ロス島的小屋に帰った。日がたつにつれて、太陽の見える時間はいよいよ減っていき、四月二十三日、地平線上にわずかのぞいた太陽は、それから四か月の間、昼も夜も、とうとうそのすがたをあらわさなくなった。長い長い南極の冬がきたのである。スコットたちは、冬ごもりの生活にはいられなければならなかった。

小屋のかべは二重にはり、その間に海草をほして作ったものをつめて、外の寒気をさえぎるようにした。小屋の中にだんろを置くと、冬もあたたかであった。小屋を中心に、馬小屋を犬

小屋、倉庫などが建ち、小さなかりの村ができた。

冬ごもりの間にも、気象の観測をしたり、生物の標本をさい集したり、馬や犬をならしたり、食物にする魚をとったり、毎日の食事のことなどいろいろな仕事がある。一同は日課をきめて規則正しくくらしした。また、ピアノ、ちく音機をはじめ、いろいろの遊び道具、いろいろな書物まで備えて、生活を楽しくするよう工夫した。一同は、スコットを中心に、世界の果にすることもわすれて、毎夜おそくまで楽しく話しあい、これからの計画についていろいろと研究をおこたらなかった。



この間に、スコットにとって二つの大きな心配があった。その一つは競走相手のアムンゼンが、別の基地にいることが確かになったことである、いま一つは。犬と馬についての手ちがいであった。たよりにした馬は、寒さに弱く、次ぎ次ぎにたおれて、残ったのはわずかに十頭、馬のかわりになる寒さに強い犬も三十二ひきで、アムンゼンの用意した百十六ひきにくらべるとまことに心細かった。

しかし、スコットの勇氣は少しもくじけなかった。長い冬も八月になるといよいよ春の近づいたことが感じられ、基地は次第に生き生きとしてきた。準備は整い、今はもう春の太陽を待



つばかりであった。

3

八月の二十五日、待ちに待っていた、太陽ははじめて北の水
平線上にその一部をのぞかせた。春がきたのである。スコット
以下全員、喜び勇んで出発の準備にかかった。科学の調査隊は
もちろん、全員この夏こそ南極をとめざしているのだ。

ところが出発まぎわに思いがけない故しようが次ぎ次ぎおこ
って、出発は日一日とおくれた。先発のモーターそり隊の出か
けたのが十月二十四日、馬そり隊の出発は、三十一日になって
しまった。この二隊は、八十度三十二分の地点まで進み、そこ
でスコットの本隊を待ち合わせる事になった。

もう真夏に近い十一月一日、スコットら八名の本隊は、めい
めい一頭ずつの馬そりをひいて、広々とした白い野原の果に向
かって出発した。

出発のおくれたうえに、また思いが
けない故しようがおこった。それはさ
きに出発したモーターそりであった。
残っていた二台が二台とも故しようを
おこし、まったく使いものにならなく
なった。スコットは、モーターそりの
機械の力で、たくさんの貯蔵食りよう
を一気に運び、人間や動物のほねおり
を少なくしようとしていたが、今となっては、そのほねおりが



逆に人間に加わることになったのである。

基地から南極までは千五百キロもある。その間、はじめは氷が着くまでの氷原上の行進、次ぎは氷がの横断、最後は南極まで高原の上を行くのである。

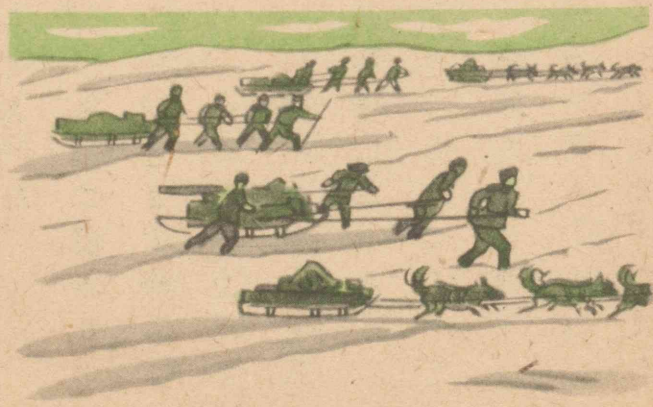
はじめの氷原をこえるのに、予定よりもはるかに多くの日数がかかった。それでも、一トン貯蔵所からさらに南へ、第一、第二、第三と貯蔵所を作っていた。その間まる一か月の行進は、まったく人間の力の限りをつくしたものであった。

天気の良い日は風が無く、日はガラガラとかがやいて、重苦しい防寒具をつけたからだは暑さにうだる。にわかにはげしいふぶきになると、たちまち手足の指はどうしよういにかかる。馬は次ぎ次ぎに弱り、とうとう一頭のこらずうちころさなければ

ならなくなった。馬の苦しみをなくするために、食りよを節約するためにも、はるばるいっしょにきた愛馬をうたなければならぬ。なんといいたましいことであろう。

十二月十日、いちばんの難所ピアドモア氷がを前にして、人が馬にかわり、四人一組になって引くそりが三台、それに犬そり二台で進むことになった。

世界最大のこの氷がは、広い所でははばが七十キロもあり、所々に底知れないわれめがある。この上を人間がそりを引いてのぼるのである。スキーがきかなくなる



と、それを引いて行く。一足一足六七センチもある雪にもぐ
る。こうして、氷の中に第一、第二、第三と貯蔵所を作りあ
げたのは、年もくれかかるクリスマスのころであった。

いよいよ最後の高原を進むことになった。これは二組八人の
とっ進隊が行い、ほかのものは、北に向かってひとまず帰るこ
とになった。とっ進隊は一日中太陽を頭上に、白銀の中を進ん
で第八の貯蔵所まで作り、一月の三日、ついに南い八十七度三
十二分、海ばつ三千メートルをこえる南極の高原に立った。

ここでスコットは最後の準備を整えた。食りよりのつごうで
八人が全部行くことができない。第一のとっ進隊だけを残し、
あとのものは引き返さなければならぬ。隊長スコットをはじ
めウイルソン、パワーズ、オーツ、エバンスの五人が、最後の

とっ進をすることになった。

五人は、ひき返す同志に、めいめい家族への手紙を預け、固
いあく手をかわしていよいよ極地に向けて出発した。

4

はてしない高原、れい下十七八度から二十三度の中を進み、
テントを張ってはとまり、また進む。苦しいけれども、今まで
の苦勞にくらべるとなんでもなかつた。最後の目的地南極へ着
く希望で、五人は勇気をふるってとっ進したのである。

一月十六日、五人は相変わらずだまされたままそりを引いて行進
していた。南い八十九度をこえると、いよいよこん難となった
が、朝から十四キロ進み、一時ごろ昼食、二時ごろ出発してま

た一時間ばかり進んだ。

その時である。五人の中のひとりにはハツとした。行く手の氷原に黒い旗のようなものが一本、風にはためいているのを見つけたのであった。一同はけたたましいさけび声をあげながら足を急がせた。近づけば近づくほど、みんなの不安はいよいよ確かなものになった。旗はそりからはずしたらしい木材に、ありあわせの黒いきれをくくりつけたものであることがわかった。



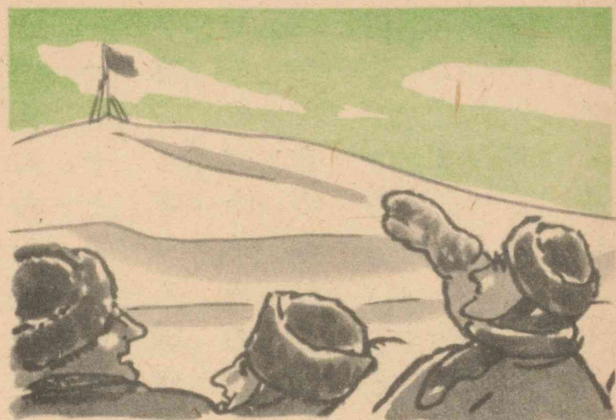
よく見るとあたり一面に、そりやスキーのあとがあり、犬の足跡もいりみだれてついていた。そればかりか、旗のすぐ

そばには、人がキャンプしたあとまではずきり残っていた。

南極までわずか二十六キロの所である。人類の歴史始まってから、まだひとりとしてこのふみこんだことのない土地に、こんな足あとがあるとは――。

五人は、いちように競走者アムンゼンを思いおこした。ひと足先にかれが極心に着いたことはもう疑う余地がなかった。

「おそろしい失望だ。盟友の諸君にはほんとうにすまない。いろいろな感じでむねが一ぱいだ。五人で話し合ったが、とにかくあすは極心まで進もう。あとは全速力で帰らなければな



らない。すべてのゆめは終わった。帰り道はどんなにつまらな
い旅だろう。

スコットの日記には、その時のことがこのように書かれてい
る。五人のがっかりしたようすがむねにせまってくる。

一月十七日、極地に着き、天測によって極心の位置を確かめ、
用意のイギリス国旗をひるがえ

したのは十八日の正午近くであ
った。その喜びよりも五人のむ
ねをうったのは、そこから三キ
ロほどはなれた所にあった小形
のテントである。そのいただき
にはノールウェーの国旗と、ア



ムンゼンの船の旗が風がひるがえり、テントの中には、てぶく
ろ、くつ下、上着などのほかに、五人の隊員の名と、アムンゼ
ンからノールウェー国王にあてた手紙が一通、しかもそれには
後から来るスコットにたのむというそえ書きまでしてあった。

スコットの一隊と別れたほかのものは、次ぎ次ぎに引きあげ
二月の終りには全員無事に基地に着いた。

ところが予定の三月二十日過ぎてもスコットたちはすがたを
見せない。と中までさがしに出てみたが、なんの手がかりもな
かった。みんなは次第に不安になってきた。四月にはいると二
度めの冬が来る。もうそのころには、五人がそう難したことは
まちがいないように思われた。

気にかかりながら長い冬をこし、二度目の春のきた八月から準備をして、八人のそうさく隊が基地を出発したのは十月の終りごろであった。

南へ進むこと半月ばかり、十一月二十日の昼ごろ、一トン貯蔵所から二十キロ進むと、西へ一キロほどはなれた雪原の中に、なかば雪のふきだまりにうずまったテントが一つ、そのそばにはスキーのつえが二組と、そのほ柱の竹ざおが一本、雪の上に頭を出しているのを発見した。

かけよって雪をかけた。やがてテントをすっかりほり出してみると、その中に、変りはてた三人のいたましいすがたがあった。

一行の者は、断腸の思いでしばらくそのすがたに見入った。

隊長スコットをまん中に、左にウイルソン、右にパウーズがしずかに目をつぶったまま横たわっていた。テントの中はきちんとかたずき、スコットがいつも手からはなさなかった日記帳のはいったふくろも発見された。あきかんで作ったランプ、毛皮のくつをほぐしてとった燈しんもあった。死のまぎわまでとぼしいアルコールを燃やしたあかりで、貴重な日記をつけていたことがわかった。アムンゼンの手紙や、隊員のひとりから借りて行った一さつの本までちゃんと持ち帰っていた。

さらに雪の下をほると、そりやスキーや、氣象日記や、重さ十四キロ以上もある地質学の標本まで出てきた。日記によって、南極に着いたこと、三月二十一日にここまでたどりつき、はげしいあらしに九日間もとじこめられ、ついに最後をとげたこと

がくわしくわかったのである。

スコットら五人の帰り道がどんなにこん難なものであったか。エバンズはどうしようにかかって次第に弱り、そのうえはげしいふぶきが続き、うえと、ここえと、重いそりを引く行進は苦しいかぎりであった。道々貯蔵所をさぐりあてて食べ物と油をおぎない、二月はじめにやっと氷がのいただきの貯蔵所にたどりついた。氷がのわれ目をよけて下る難行の中でも、ウイルソンの指導でふ近の地質や、貴重な鉱物標本をさい集したのであった。

ウイルソンとパワーズもどうしようで足をいためていた。エバンズはますます弱り、ついに氷がのふもとで一生を終った。それからの道はいよいよ苦しく、めったにない悪い天気が続き、

昼はれい下三十四五度、夜は四十度にまで下り、そのうえ、保温のための油が不足した。そのうちにオーツも急に弱ってきた。オーツは、自分のためにめいわくをかけないやうにと、三月十五日の夜テントの外に出て永久にすがたを消したのであった。

スコットら三人は、最後の勇気をふるって、一トン貯蔵所まであと二十キロの所まで着きながら、連日の暴風とつかれのために一步も進むことが出来ず、ついに悲そうな最後をとげたことなど、すべてスコットの日記で知ることができた。

エバンズやオーツのいがいは、そうさく隊が必死に努力したがついに発見することができなかつた。

南極の英ゆうスコットはおしくもその栄かんをアムンゼンに

ゆずった。しかし、このたん検隊の大きくなってからは、その科学的な調査にある。南極の気象や、地質や、水陸の生物から、人のからだにおよぼすえいきょうまで、調べあげ、南極のほんとうのすがたを世界に知らせたのであった。

それにもまして大なのは隊長スコットのけだかい精神であった。苦しい中であって多くの隊員をよくまとめた。勇気をふるいおこし、死にのぞむまで自分の責任を果したのであった。かた手で盟友ウイルソンをたくようなしせいで息絶えていたスコットのすがたは、その美しい友情と愛の精神を永久に物語っていた。



学習の手引

一 花のように

(一) 花

- (1) この詩を読んで、どういう感想を持ちましたか。それをノートに書いてください。またみんなで話し合ってください。
- (2) この作者は、私たちに何をいおうとしているのでしょうか。自分で読みとったことを発表してください。

(二) 運動場

- (1) 運動場で遊んでいるみんなのようすを、そのままうつつした詩です。どういふ点が、生き生きと書けていると思いますか。

- (2) 「さけびがさけびをよび、動きが動きを追う」といふのは、どういふ心持をあらわしているのだと思いますか。

(三) ここに手がある

- (1) 手と足はどのような力をもっていると思いますか。この詩を読んで自分の考えたことを言ってください。

- (2) この詩を読んで、もっとも強く感じた点について、話し合ってください。

二 新聞の話

(一) 輪転機のうなり

- (1) 文を読んで次ぎの問題に答えましょう。
○ 新聞社のはとほどんな働きをしますか。
○ はとは、どれくらい重さのものを運ぶことができますか。

○ 世論調査はなんのためにするのですか。

ます、どんな方法で調査しましたか。

○整理部はどんなことをする所ですか。

○電送写真は、どんなしくみで先方に送ることができるのでしょう。

○新聞の印刷される順序をお話してごらんなさい。

○輪転機が動いている時はどんなようすですか。

○新聞はどんな順序で発送部から各駅に送りどけられますか。

○新聞社見学の文を読んで、あなたはどんなことを感じましたか。

(二) 新聞の歴史

(1) この文を読んで、新聞の発生した理由を短かくまとめてごらんなさい。

(2) 印刷機を発明した人は、どこの国の何と

○本能 ○言論機関 ○通信

○記録 ○海外事情 ○報道

○耳よりな話 ○ありのまま

○提供する ○経験する

(11) 新聞の歴史を読んでどんなことを感じましたか、ノートに感想を書きましよう。

三 愛の力

(一) やまどりのおかあさん

(1) この文を読んで次ぎの問題に答えなさい。

○作者が高原を歩いていたのは、いつごろのことですか。

○高原は、どんなようすでしたか。

○作者は、どんな気持ちで高原を歩いていましたか。

○どうして、もとの所へひき返したのですか。

いう人ですか。

(3) 現代のような新聞はいつごろできたのでしょうか。

(4) 日本の新聞のおこりは、いつごろで、何という新聞でしたか。

(5) 読売かわら版について知っていることを説明しなさい。

(6) 文久新聞にはどんな種類がありましたか、また、なぜ文久新聞といたのでしょう。

(7) 日本ではじめてできた日刊新聞は、何という新聞で、いつから発行されましたか。

(8) 明治十四年ごろの新聞内容は、どんなけい向でしたか。

(9) 新聞は、私たちの生活にどんな関係がありますか。

(10) 次ぎの語を使って短い文を作りましよう。

○やまどりは、どんな所に、どんなふうにしていましたか。

○写生している間、やまどりはどんなふうにしていましたか。

○写生をなぜ半分でやめたのでしょう。

(2) 何が作者の心を強く打ったのですか。

(3) あなたは、この文を読んでどんなことを一番強く感じましたか。感想をノートにまとめてごらんなさい。

(二) めぐりあい

(1) この文を読んで次ぎの問題に答えなさい。

○車だいくの夫婦はジャンをどんなにかわいがっていましたか。

○ジャンがいなくなったのは、いくつ時ですか。どうしていなくなりましたのでしょう。

○ジャンがいなくなった時、車だいくの夫婦はどうしましたか。

○車だいくの夫婦は、どうして住みなれた家を売りはらって旅に出たのですか。

○旅に出た夫婦は、どんな苦勞をしましたか。

○夫婦はどうして、パリに向かったのですか。
○どうして、夫婦は聖水のほう仕をするようになったのでしょうか。

○わかい男がジャンだとわかるまで、夫婦はどんなことを話し合い、どうしましたか。

(2) わかい男は、どうして車だいくの夫婦が自分の両親だとわかったのでしょうか。

(3) 「めぐりあい」の文を読んで、あなたが最も強く感じたことはどんなことですか。

(二) ものいうおもちゃ

(1) 電話の発明で有名なアレキサンター・グラハム・ベルの伝記ですね。よく読んで成功するまでの苦心をよく調べてみましょう。

(2) その発明の苦心を、年令と研究のすすみかたとから考えて、いくつかに区切って順番に調べてみましょう。

○ベルは、いつ、どこで生まれましたか。

○小さいころのベルはどうでしたか。

○十五才のころ、どんなことに気づきましたか。

○ボストン市のろうあ学校にいた時、どんな考えがうかびましたか。

○その後の苦心について、要点を書き出して、くわしく調べましょう。

○成功の日の喜びについて、あなたはどうか。

四 工夫と発明

(一) 電燈の消えたとき

(1) この文を読んで、仁一君はどんな子供だと思われましたか。

(2) 仁一君のうちだけが停電したげんいんはどこにありましたか。

(3) 安全器のヒューズをつけかえた仁一君は、おかあさんにどんなことをききましたか。またなぜこんなことをきいたのでしょうか。

(4) ねえさんの電気スタンドのつかないげんいんは、どこにありましたか。それを発見するまでに、仁一君はどんなことを考え、どんなことをしましたか。

(5) みなさんも、仁一君のよううに、電気について、いろいろなことを研究して、それを発表してください。

思いましたか。

(3) すぐれた発明家の伝記を読んで、その工夫と苦心について、よく考えましょう。

(4) 伝記を読んで、感じたことや、考えたこと、の感想文を書いて、発表しましょう。

五 世界の旅

ずいぶん長い文ですね。国々の特ちょうによく注意しながら、まず、ひと通り読み通しましょう。意味のわからないことばや、特別な名まえが出たら、いちいちノートに書きとりましょう。

学習の参考として、世界地図・世界地理ふろぐく大けいなどをじょうずに使いましょう。全文の見通しがついたら、その一つ一つをくわしく調べましょう。

(二) アメリカの町々

(1) サンフランシスコ・シカゴ・ニューヨークについて、それぞれの町の特ちょうを書きだしましょう。

(2) アメリカの町々について、どんな感じをもちましたか。

(二) イギリスの工学

(1) グリニッチ天文台・ケンシントンの工科大学の要点をノートにまとめましょう。

(2) イギリス人、および、イギリスの工学についてどう思いましたか。

(三) フランスの美術

(1) バリの町の特ちょうを調べましょう。

(2) エッフェルどうの飛行家の話を、どう思いましたか。

(3) フランスは、どんな国だと思いましたか。

(四) スイスの風景

(1) ジュネーブ・ベルン・アルプス山脈について調べましょう。

(2) スイスについては、どういうことを強く感じましたか。

(五) イタリアの古都

(1) 古都ローマについて、どう思いましたか。

(2) ナポリ・ボンベイの特ちょうは何ですか。

(3) イタリアでは特に何を感しましたか。

(六) インドの子供

(1) インドの子供で感心したのは何ですか。

(2) インドについてどう思いましたか。

ひと通り調べ終えたら、もう一度全文を見通して、国々の特ちょうをはっきりとさせましょう。またそれを、紙しばい、げん燈に作って、おたがいに発表しましょう。

六 新しい足あと

(二) 原始林の明星
(1) この文は、一、二、三の三つからできています。全体を通してよく読めるように練習してから、一つ一つをくわしくしらべてみましょう。

○一の文は、シュバイツアーたちのどうしたことが書いてありますか。

○二の文では、土人たちが、シュバイツアーをどうしたことが書いてありますか。

○三の文では、シュバイツアーがどうしたことが書いてありますか。

(2) シュバイツアーとロコについて、次ぎのことをしらべなさい。

○シュバイツアーは、どんな心持の人だと思えますか。その心持のよくあらわれた所を書きぬいてみましょう。

○ロコについては、どう思いますが。そのよくあらわれたところを書き出してみましょう。

(3) この文を読んで、次ぎのことからについて感想をまとめましょう。

○この文に、「原始林の明星」という題をつけたわけを考えてみましょう。

○この文を読んだ感想を文にまとめて、発表し合ひましょう。

(4) 次ぎの語句をかいしゃくしなさい。

○不思議なけはいに耳をすました。

○高くきわまりない夜空をおおぎみた。

○このあれ果てた土地にもようやく新たな芽ばえが育ってきたと感謝するのであった。

(5) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。

助手 熱病 貸す 燃える 注しや

道具 部落 祖父 祝福 病舎

(二) 南極のスコット

(1) スコットは、南極たん検をするために、

どんな準備をしたか調べましょう。

○テラノバ号には、どんなものを用意して
積みこみましたか。

○ニュージードのリトルトンをいつ出
発しましたか。その時のようすは、どのよ
うでしたか。

(2) リトルトンを出発して、ロス島につくま
での航海のようすを調べてみましょう。

○あらしにあった時のようすはどのよう
でしたか。

○南氷洋のようすは、どのようにかわつて
いましたか。

(3) ロス島の基地から一トン貯蔵所の建設ま

でのようすを調べましょう。

○食糧貯蔵所を次ぎ次ぎとつくって行くよ
うすはどのようでしたか。

○スコットたちの冬ごもりの生活はどのよ
うでしたか。

(4) いよいよ基地を出発して、最後の突進を
するまでのようすを調べましょう。

○出発のおくれるようになったのはどうし
てですか。

○とちゅうで、どのようなこんなんがおこ
りましたか。

(5) かえらぬスコットたちをそうさく隊はど
のようにして発見しましたか。

○変りはてたスコットたちを発見したとき
の人々はどのようでしたか。

○この文に書きあらわされたスコットの行
いや心持についてどう感じますか。



新しく出たおもなことば

アーチ	意外な	118	オランダ	26
愛馬	息絶え(て)	144	おろおろする	103
あきんど	いな	144	海外事情	28
あく手	いたましい	140	がいこつ	92
アザラシ	イタリア	90	快晴	121
預かり証	一ざ	36	がいせん門	84
圧さく機	一ばんのり	118	快速船	76
あとがま	一ぱく	73	がい路じゆ	85
アパート	一隊	139	海草	127
アホウドリ	一行	140	かいば	126
アルミ管	糸口	62	開設	28
安全器	入りみだれ(て)	136	科学的調査	119
いいなすけ	印画紙	16	各部	14
いがい	インド	94	火災	26

事件	紙型	祝電	祝福	シカゴ市	サンフランシスコ	酸素	ざら紙	最新式	最期	最高記録	サーカス	混血児	コロセウム	ご案新聞	小屋がけ
14	180	120	111	74	72	29	14	81	141	12	36	107	91	28	126
ジュネーブ市	需要	週刊	十五世紀	集団生活	受電そご置	衆議院議員選挙	写真通信管	社会生活	事務	指導	出勤し(て)	時事的な	辞し(て)	支持	子午線
86	28	25	24	22	16	13	12	25	10	142	43	26	29	13	79
スタンド	頭上	スコットランド	スクリュー	人種	新憲法	心線	信者	受話機	白ナガスクジラ	支流	助手	常設美術館	上陸地点	上陸第一歩	しゅう長
56	134	62	80	95	29	55	42	15	123	105	114	86	124	77	107
専門の	前と	全速力	全国紙	世論調査	絶命	絶景	節約	接しよく	責任	聖水	政とう	政治運動	正確	声えん	スパーク
65	117	137	29	12	84	94	132	56	118	42	28	28	6	118	58

機体	気象	機関紙時代	機会	記おく力	かんそう機	観測	感動し(て)	感光	官板	変りは(た)	かなめ	かどわかし(た)	活字	合戦	火山ばい
83	128	28	22	46	16	128	48	16	26	140	15	50	17	26	94
計算じやく	系統	形式	ケース	けい向	経営	ぐうぜん	きわまりない	議論	旧せき	極心	極地	競争者	教会	貴重な	基地
13	75	25	18	28	73	42	103	28	93	137	117	118	42	141	116
こう下	工学	高か鉄道	工科	校えつ部	考案	言論機関	げん燈	原始林	原動力	原因	現在	現像	ゲラ刷	けたたましい	計算器
83	76	75	80	17	80	25	31	97	24	60	29	16	17	124	13
湖辺	古都	こづきまわし(て)	国会	古代	ごじ悲	誤字	小組	古今の	国運	鉱物標本	コード	交しよう	こう外	高原	工芸
86	90	106	28	91	42	15	17	86	28	142	56	28	87	30	91

南極たん検	117	はためい(て)	136	ふ亭	64
南極大陸	118	バックingham宮てん	77	婦人	46
難行	142	発送部	20	不戦国	90
難所	133	発生	22	不足し(た)	143
日刊新聞	27	発達史	25	部落生活	23
日しゃ病	95	発行中止	27	フランスパン	32
にぶい	15	発着	74	ふれまわる	23
入港	117	早わざ	34	文化国家	29
ニュージラランド	118	バレボール	6	分散	50
ニューヨーク市	74	ハワイ	79	平均し(て)	12
ねぶくろ	139	万事	78	へいぜい(から)	43
念じ(ながら)	42	ハンドル	13	ベッド	77
野ずえ	37	ひざまずく	101	ヘルメットぼう	95
場合	23	悲そうな	143	ペンギン鳥	122
配布	27	ひそめ(て)	98	報道中心	28
ばく音	83	必死	120	ほう仕	43

そう快	87	大道て	26	統計	13
そう身具	85	大理石造り	93	投書	13
総称し(て)	27	タクシー	77	どうしょう	142
そうさく隊	140	立ちこめ(て)	37	燈しん	141
倉庫	128	単調	45	銅貨	96
そう大な	93	断腸	140	道化師	36
そう難	139	地下鉄	75	特色	29
ソケットプラグ	56	地点	130	特ちよう	107
底知れない	133	地方紙	29	と般場	74
組織化	25	調合法	116	とっ進	117
そしり	67	貯蔵	125	トライア	87
隊員たち	124	角ぶえ	100	内容	28
隊長	117	連ねて	72	中つき	125
大けつ作	85	提供	21	なごり	110
大西洋	76	てだて	51	ナポリ	94
タイプライター	13	手ちがい	129	とう技場	91
				とうギボウシ	30
				電流	16
				電送写真室	16
				電信機械	64
				伝書バト	11
				電気機関車	81
				電気パン焼器	52
				電気ベルト	15
				天日	95
				天測	138
				天文台	79
				天災	26
				テレタイプ	15
				テッサン	86
				てつ夜	13

新しく出た漢字

丁 <small>ちやう</small> (53)	幹 <small>みき</small> (30)	性 <small>せい</small> (23)	刷 <small>さつ</small> (15)	輪 <small>りん</small> (10)
絹 <small>きぬ</small> (55)	臨 <small>のぞ</small> んて (34)	版 <small>はん</small> (26)	油 <small>あぶら</small> (17)	均 <small>きん</small> (12)
接 <small>せつ</small> (56)	借 <small>か</small> りて (43)	称 <small>しょう</small> (27)	型 <small>けい</small> (18)	査 <small>さ</small> (12)
故 <small>こ</small> (57)	勤 <small>きん</small> (43)	刊 <small>かん</small> (27)	包 <small>つつ</small> んて (20)	算 <small>さん</small> (12)
因 <small>いん</small> (60)	減 <small>へ</small> って (44)	著 <small>ちやく</small> しく (28)	輸 <small>ゆ</small> (21)	衆 <small>しゆ</small> (13)
至 <small>いた</small> る (64)	低 <small>ひく</small> (47)	需 <small>じゆ</small> (28)	提 <small>てい</small> (21)	議 <small>ぎ</small> (13)
周 <small>しゆう</small> (67)	貴 <small>き</small> (50)	酸 <small>さん</small> (29)	未 <small>み</small> (22)	拳 <small>きん</small> (13)
困 <small>い</small> (67)	財 <small>さい</small> (50)	辞 <small>じ</small> して (29)	敵 <small>てき</small> (23)	誤 <small>ご</small> (15)
余 <small>よ</small> (69)	仁 <small>じん</small> (52)	冷 <small>つめ</small> たい (30)	否 <small>いな</small> (23)	検 <small>けん</small> (15)

まどらかな	本能	本隊	本国	ほどこしもの	ほつつき歩い(て)	保存	ポストン市	保しよう	牧場	北極	暴風	ぼう高とび	方形	防寒具	保温
103	23	130	62	42	42	91	61	29	4	118	120	9	14	132	143
もとづく	木版	モールス記号	もうれつな	メルボルン	めぐりあい	盟友	むらがる	無数	民間の	明星	耳よりの	南半球	道すがら	ミケランゼロ	未開時代
24	26	15	19	117	35	137	121	74	25	97	23	120	39	91	22
要求	よう岩	洋書調所	洋学者	輸入し	輸送	ゆずられ(ました)	雪海ツバメ	有力な	ゆうゆう	ゆう大な	友情	ゆうかな	ヤシ	夜行列車	訳し(て)
28	94	27	27	27	21	50	120	29	6	84	144	83	97	74	27
ワシントン	わかえつ(て)	ロスアンゼルス	ローマ法王	老貴婦人	レントゲン	連日	輪転機	流水	読売かわら版	予定	余地	横たわつ(て)	ヨロツバ	ようしゃなく	
66	7	73	93	50	80	143	10	121	26	105	137	141	114	123	

文を書いた人

- 一 (一) 花……………村野四郎
- 二 (二) ここに手がある……………江口一
- 三 (一) やまどりのおかあさん……………中西悟堂
- 四 (二) めぐりあい……………河盛好藏
- 五 (一) 電燈の消えた時……………岡義雄
- 六 (二) 世界の旅……………石井房直
- 六 (一) 原始林の明星……………大滝重直

このほかの文は編集部と児童のもの

絵をかいた人

- 小谷野半二
- 佐藤八郎
- 高橋庸男

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 21, 1950)

昭和二十五年三月二十一日印刷
昭和二十五年三月二十五日発行
(昭和二十年 月 日 文部省検定済)

国語の本十一(小学校第六学年前期用)

著者 西原慶一 泉節二
山下正雄 飛田多喜雄
小山玄夫 齋田喬

発行者 東京都北区稻付町一丁目一〇八番地
二葉株式会社
代表者 大野治輔

印刷者 東京都北区稻付町一丁目一〇八番地
二葉株式会社
代表者 大野治輔

発行所 東京都北区稻付町一丁目一〇八番地
二葉株式会社

腸 (140)	照 (124)	混 (107)	潔 (87)	營 (73)
張 (141)	築 (125)	兵 (110)	薬 (88)	系 (75)
導 (142)	貯 (125)	祖 (110)	量 (88)	統 (75)
鉦 (142)	蔵 (125)	舍 (113)	居 (91)	預 (76)
永 (143)	庫 (128)	鼻 (114)	墓 (92)	氏 (76)
	標 (128)	責 (118)	景 (94)	賞 (82)
	規 (128)	基 (119)	銅 (96)	技 (83)
	張 (133)	暴 (120)	貸 (99)	辺 (86)
	盟 (137)	塩 (123)	支 (105)	脈 (87)



なまえ

広島大学図書

0130449930



二葉株式会社

庫

0
30